
「白銀の華」の代わりにどうぞ。

ばにえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「白銀の華」の代わりにどうぞ。

【Nコード】

N3125U

【作者名】

ばにえ

【あらすじ】

異世界に渡ってしまったにリエナが、後宮で妾として奮闘するお話。あらゆる手を使って集めた情報を武器に、皇帝を上手く欺きつつも帰還方法を探す。

白銀の華シリーズが更新できないことを申し訳なく思った作者が、更新できない間少しでも読者の気が紛れれば……と考えて執筆したものです。女性向けです。

1．リエナの目的

ここは、とある王宮の一角。

「あー、疲れた〜」

繊細な彫刻が施された扉が開き、小綺麗に整えられた部屋に一人の少女が姿を現した。

地味な茶色の髪に、同じ色の瞳。何処にでもいる普通の少女だが、その身に纏うドレスは華美、いや豪奢と言うべきか。

余りにも派手すぎるそれだが、金遣いの荒い貴族にはお似合いかもしれない。

「おかえりなさいませ、リエナ様。……で、どうでしたか、宴の方は」

ドレスを脱ぐリエナを手伝いながら、侍女のアリーはわくわくした様子で問う。

「もちろん、完璧だったわ!~!」

夏川里菜、18歳。

異世界トリップの後、運良く公爵家の養女に迎えられた。

帰還方法を探すため公爵夫妻が提案したのはなんと、妾として王宮へ上がることだった。

「王宮は膨大な量の情報が飛び交う場所だ。それに、貴族でも手に

入らないような貴重な書物もたくさんある。妾になれば、ここにいるよりもずっと多くの情報が得られるにちがいない」

公爵家当主はそう語る。

だが、こんな小娘が王宮をこそそ嗅ぎ回っていて、まずいのでは正直、世界を渡る方法を探すためには、禁書にまで手を出さなければならぬ可能性もあるのだ。

私に何かあった時一番に迷惑を被るのは、他でもない彼らだ。

「大丈夫、後宮には多くの女性がいるから、一人や二人増えていたってわかりやしないわ」

奥様は、茶目つ気たつぷりにウインクをした。

本当に大丈夫だろうか……と心配を拭いきれないまま、私の後宮での生活は始まった。

今日は、後宮に入って初めての宴だった。

今代の皇帝は、暴君であつた先代皇帝の圧政に苦しむ民を憂い、彼を討ち即位した。

皇帝は即位後、多くの改革を打ち出して国を再興した。

彼の手腕は優れたもので、この国は瞬く間に豊かな楽園へと変貌を遂げていった。

優れた統治能力を持つ皇帝は、20歳と若いながらも賢君と謳われ、その優れた容貌と相まって女性たちの心を鷲掴みにしている。

さて、そんな彼の後宮には望む望まざるに関わらず、多くの女性がいる。

女性たちは、自分の美貌と才能を武器に国王の寵愛を得ようと必死だ。

今回の宴は、水面下で血みどろの争いを繰り広げている後宮の女たちや、陛下の目に止まろうと参加した令嬢たちが集まる皇帝主催の宴だった。

「毎晩寂しくて眠れませんのよ」

「陛下、実家から美味しいお酒が届きましたのよ。今晚ぜひ一緒にしませんか？」

「あら、陛下はお疲れでいらっしゃるようだから、私の演奏を聴きにいらっしゃるべきだわ」

女たちは、その色っぽい唇にのせてそれぞれに言葉を紡ぐ。
そこらへんの男だったら、間違いなく誘惑に乗っているだろう。

……だが、皇帝陛下の場合は。

女が触れるたびに、誘惑の言葉を発するたびに、眉間の皺は深まっていくばかり。

勿論その表情は、ごくごく僅かな変化に過ぎないので誰も気付かない。

ふふふ、楽しい光景ね。

もともと皇帝の寵愛に興味のないリエナは、愉快そうに眺めている。

実は、この皇帝陛下、貴族の女性が嫌いなのだ。

甘ったるい香水の匂い、目が痛いほどの派手なドレス。

美しい見た目とは裏腹にどうやって人を蹴落とそうかと画策を巡らす醜い本性は、蔑みや嫌悪しか感じられない。

……らしい（リエナ・リサーチより）。

派手なドレスに身を包んだ女たちは、どんどん皇帝を囲んでいく。もちろん、その女の中には周りの女性と同じく似合わない極彩色の服を纏ったりエナも含まれている。

すべての女が皇帝に群がっている状況では、壁の花となっていたり地味なドレスを着ている方が目立つのだ。

おっと、私もそろそろ誘惑合戦に加わらなければ。

これ以上興味のない素振りを見せると、陛下に気に入られかねない。なんせ、陛下の理想の女性の条件に、地位や権力に媚びない女性とというのがある（リエナ・リサーチより）。

皇帝の苦しむ様子を、心の中で笑みを浮かべつつ眺めていたりエナも女をかき分け皇帝に近付く。

「皇帝陛下、私の部屋へもぜひお渡り下さいませ」

その勢いで皇帝の腕に絡み付き、上目遣いで媚びるように皇帝を見る。

皇帝は思わずリエナを振り払いそうになるが、腕を必死に押さえて耐えていた。

「……今日の宴はこれで」

皇帝はついに忍耐力が限界に達したようで、眉間に青筋を立てながら会場を後にした。

今日の宴は、我ながら天晴れの結果となった。

「……てな感じだったの」

「素晴らしいですっ！！さすがリエナ様。陛下もイチコロですね」

そんな会話を交わしながら、リエナはするりとウィッグを外した。その下から出てきたのは見事な黒髪。日本人なら、誰でも持つ色だ。リエナは肩に僅かにかかるくらいの真っ直ぐな髪を弄ぶ。

「ウィッグって、蒸れるのよね」

実は、隣国では黒眼黒髪は巫女である証拠とされ、神の使いだなんだと持て囃されている。巫女なんて死んでも御免なので、ウィッグや髪を染めることで隠している。

因みに瞳はカラーコンタクトで誤魔化している。

さらに、リエナは分厚い化粧も落としていく。

別にしたくてしているわけじゃない。

……だって、皇帝の嫌いな女ベスト10に、この条件が入っているのだから、仕方ないのだ（リエナ・リサーチより）。

リエナは、皇帝の嫌いな女性を演じることに情熱を注いでいた。

普通にひっそりと暮らしていれば良いではないか、と思うが、皇帝が好むのはそんな慎ましく大人しい女性だ。

リエナは後宮で暮らしているが、皇帝に身を捧げる気も、ましてや愛を捧げる気など欠片もなかった。

だが残念なことに、後宮の女たちの大半が陛下の『嫌いな女』の条件を満たしている。

つまり、これくらいの努力では所詮“並”にしかないのだ。特定の女性がいない皇帝が、たまたまりエナの所へ来てもおかしくない。

リエナが目指すのは、『皇帝が大嫌いな女』なのだ。それこそ、自分の部屋を訪れる可能性が0になるくらい。

今日の宴では、一番癢に触った女になれたに違いなかった。

「これで皇帝陛下のお渡りは当分避けられそうですね」

「そうね。明日はゆっくり書庫にでも行きましょうか」

二人は明日待ち受けている幸せな日々を思いを馳せる。

「あとはお風呂に入って眠るだけだから下がって良いわよ。明日は一日中読書に明け暮れるつもりだから、しっかりと目を休めないからね」

こうして宴の夜は更けていった。

後に、不幸な事態が待ち受けているとも知らずに。

2・皇帝初訪問

リエナは快適な生活を送っていた。
毎日朝から晩まで異世界転移に関する本を読み漁る……これほど幸せな時はない。

陛下が訪れないとわかっていると、安心できるわ。

なにせ、陛下が来るとわかれば、後宮の女は大変だ。
大量にあるドレスの中から自信のある一枚を選び出し、化粧や髪型はいつも以上に侍女がよりをかけ、準備には途方もない時間がかかる。

もちろん後宮の女性たちは皆、皇帝がいつか自分の所へ来てくれると信じて疑わないので、日々の身嗜みには余念がないのだが。
リエナはそんな面倒なことはしたくはないのだが、皇帝は無駄に着飾る女は嫌いなので（リエナ・リサーチより）一応そうしている。

「あゝ、平穩ね」

「そうでございますね」

……そんな香気な日々を送っていたある日のこと。

「たっ大変です、リエナ様！！」

朝早くから侍女のアリーが慌てて部屋に駆け込んできた。

「皇帝陛下がいらっしゃるようです！！！！」

「いつ？」

「今日のお茶の時間に。最近毎日、女性のもとを順に回っているよつで」

はは、ご機嫌とりなわけだ。

皇帝の訪門がないことで後宮の女性が不満を言い始めているのは知っていた。

だが、女を嫌う皇帝はずっと後宮に行くこと……特に夜の訪いを避けていた。

最近の後宮に行かないことで大臣側からも苦情の声があつたらしく、皇帝もしぶしぶ動いたのだろう。

政治に関しては優秀な皇帝陛下だが、世継ぎを残すという点においては優秀ではなかったようだ。

あんなに好き嫌いが激しいようでは一生皇妃を娶ることなんて無理そうだ。

女の醜い争いが嫌いだというのに、正妻がいないせいで側妃や妾の間での争いが激化し、さらに大臣から自分の娘を後宮に送り込まれる羽目になるのだ。そのことを皇帝は本当に理解しているのだろうか。

「取り敢えず、準備に取りかかるわよ！」

「はい、リエナ様！」

ついに、自分の努力の成果を発揮する時が来たのだ。

実は、リエナは皇帝に関するあらゆる情報を調べ上げている。調査はもちろん今も続行中だ。

あらゆるもの……ということは、内容は私的なものにまで及ぶ。それこそ、好きな食べ物から誰も知らないような習慣まで、全て……だ。

皇帝に関するありとあらゆる調査の成果……それこそが、リエナ・リサーチなのだ。

「さてと、何を仕掛けようかしら？」

リエナは笑みを浮かべた。

一時間程かけて、部屋の全ての模様替えが完了した。派手で、無駄にお金をかけた、金色に輝く調度品。品の欠片もない壁紙。ちなみに、精巧な細工が施されたものはNGだ。陛下は芸術品には目がないので。

「よし、模様替えはばっちり終わったわ。あとはお化粧と髪とドレスだね」

「リエナ様、ドレスはこれに致しましょう!!」

アリーが差し出したのは、余りにも派手すぎて配色のおかしなドレスだった。セットでアクセサリーも選んでくれている。

「素晴らしいわ、アリー! やっぱりアリーは最高ね」

「リエナ様こそ素敵です！」

そんなやりとりをしながらも、リエナの手は止まらず、着々と準備を進めている。

リエナはカラーコンタクト（地球産）をはめ、厚化粧を施す……それこそ、肌が窒息しそうなくらいに。

「もったいないですね。こんなお化粧はリエナ様には似合いませんのに」

リエナはなるべくこちらの顔立ちに似せるように工夫していた。

リエナの変わった容姿は目立つ。些細なことから自分の素性を疑われるわけにはいかない。

「さて、戦闘準備完了ね」

リエナは最後にウィッグ（地球産）を装着した。

「行くわよ、アリー」

「はい!!」

リエナとアリーは皇帝を迎えるために来客用の部屋へ向かった。

「陛下がいらつしゃいました」

アリーが静かに来訪を告げた。

「まあ、陛下！いらつしゃいませ」

リエナは皇帝に駆け寄り、そう告げる。

部屋に入った途端、皇帝が顔をしかめたのが分かった。

部屋の至るところが、金。調度品も金色。豪奢というか、欠片も品の感じられない部屋は、眩しいくらいに輝いている。

「ごゆっくりしていつて下さいませ」

そう言つて、上目遣いに皇帝を見上げると、皇帝は眉をぴくりと動かした。

「どうぞ」

お茶と共に、お菓子も差し出した。

しかし、皇帝はなかなか口をつけようとしない。ちらりと目をやっただけで、あとは無言で座っているのみだ。

それにしても、美形ね。

藍色の髪に、同じ色の瞳。その顔はもの凄く整っているが、中性的ではなく男性らしい顔立ち。均整のとれた体つきは、毎日の剣の鍛練の証拠だろう。

これなら、たくさんの女性が集まってくるのも頷ける。……性格だけ見るとあまりよろしいとは言えないのだが。

「陛下、どうぞ召し上がってくださいませ？」

「ああ」

リエナは勧めるが、皇帝は一向に手をつけようとしなない。

当たり前だ……全て皇帝の苦手なものだから。紅茶は皇帝の嫌う濃厚な甘い香りがするもので、お菓子は皇帝の嫌いな果物入り。

皇帝はやつとのことでお茶を一口含み、カップを置いた。その後、互いに無言の時間が続く。

リエナが口を開こうとした時、ふと皇帝が小物を置く棚の方へと目を向けた。

「あれは、お前が読むのか？」

リエナがそちらに視線を向けると……。

やばい！！……片付けるのを忘れていた。

室内の様様替えばかり考えていると、自分の部屋は少し完璧とはい難いぐらいに物が乱雑に置かれていることを失念していた。

アリーがほとんど片付けてくれているようだが、棚の貴重な資料には手を触れないようにしているから、そこには何冊かの本が積み重ねたままになっていた。

積み重ねた本の一番上には、古代史の本が置かれていた。

……過去に異世界から来た者がいないか確かめるための。

やばい、というのは、皇帝は自分の妻となるに相応しい賢明な女性を好む。

自分が賢いとはこれっぽっちも思わないが、一般的な貴族の子女は

こんなもの読まない。

さらに言うと、皇帝は古代史が好きだったような……。

—— 終わった。

自ら平穏な生活に終止符を打つ形となってしまうた。

「そんな、私が読むわけ……」

言い訳してみるが、皇帝は解っている、といった風に優しげな目でこちらを見ている。

「令嬢はそんなもの読まないが……俺は良いと思うぞ」

そのまま皇帝はご機嫌な様子で帰って行った。

「リエナ様……」

侍女のアリーが気遣わしげに声をかけてくる。

「アリー、ごめんなさい。せっかく頑張ってくれたのに……」

「そんなことないです、リエナ様は頑張りました!!」

だが、自分の計画は半分もいかないうちに台無しになったのだ。

「次もまた来るのかしら……」

.....ん、次？

また皇帝が来る↓リエナ・リサーチ使える↓皇帝に嫌われる好機。

「そうね、次に頑張れば良いんだわ！！今日の挽回をする機会があるじゃない！！」

「そうです、次に向けて頑張しましょう！！今回よりも、もっとすごい計画を考えましょう！！」

こうして二人はまた、皇帝に嫌われるための努力（ここまで来るともはや嫌がらせ）に勤しむのだった。

2・ 皇帝初訪問（後書き）

こんにちは、作者のばにえです。

白銀の華を読んでくださっている方、非常に申し訳ございません。
正直、こんな駄文書いてないで白銀の華を更新しろ、と思っ
てらっしゃる方もいるかもしれません。

この作品は、満員電車の中のことのない作者が暇潰しも兼ねて
書いているものです。

白銀の華の執筆は少しずつですが進んでおります。何故投稿しない
かと申しますと、第一話が書けていないからです。

取り敢えず頑張ります。ダメダメな作者を見捨てないでくれると嬉
しいです。

3・打倒！皇帝計画再び

今、あり得ない光景を見てしまった。

宰相は、皇帝が上機嫌で執務室に戻って来たことに目を丸くしていた。

……先程は確か、後宮訪問の予定ではなかったか。

いつもの陛下であれば、女性と対面した後は手がつけられないほど機嫌が悪い。人に当たる、物は壊す、最終的には怪我人が出て大騒ぎになることもしばしば。

いつも女が嫌いだ何だと言っていた陛下が、女性に会って嬉しそうに帰ってきた。

これ以上の奇跡があるだろうか。

「陛下、何かあったのですか？」

宰相はついに、好奇心に負けて尋ねてしまった。

「後宮に、面白い女がいた。あんな女性は初めてだ」

それだけ言うと、皇帝は書類を手に取り執務に取りかかる。

——面白い女がいた。

そんな言葉を皇帝から聞いたのは、初めてだった。

女性には、政治よりも容赦がない陛下。女性の好みはと聞かれ、自分の政務を手伝えるくらい聡明で、自分の背を預けられるくらい強

い女性。それでいて性格は大人しく慎ましやかな者が良いのだと答えた。

そんな完璧人間どこにいるのだ、とつつこみたくなるが当の皇帝は至って真面目である。

そんな理想の女性像を持つ皇帝は、どんな美女が寄って来ようとも見向きもしなかった。

最近、女性の本性を知り徐々に妥協が見られるようになってきたが、その皇帝が興味を持った人とはどのような女性なのか。

「その方は、どこの家の令嬢なのですか？」

「知らない」

「……………は？」

「知らないと言ったのだ。彼女は名乗らなかったしな。宰相、調べといてくれ。茶色の髪と瞳を持つものだ」

名乗らないのは当たり前だ。まさか頭脳明晰な皇帝陛下が、興味がないからと言って後宮の女性の名前さえ把握してないなどとは思わないだろう。

嬉しそうな皇帝に、その情報だけではどなたか調べられませんかとは口が裂けても言えそうにない。

皇帝は、素性も知らない女性を好きになったのか。まさか、他国から送り込まれた間者などではないだろうな……………早急に調べねば。

「あと、古代史の専門書を手配してくれるか？彼女に贈ろうと思う」

あの陛下が、女性に贈り物……。

感極まった宰相は、（素性がはつきりすれば）敬愛する皇帝陛下を全力で応援することを誓った。

陛下が初めて興味を持った女性は、古代史の好きな方でした。

「リエナ様、陛下がいらっしゃる日が決まったようです。」

朝食の片付けから嬉しそうに戻って来たアリーを、リエナは待ちわびていたと言わんばかりに迎える。

「本当に？いつなの？」

「明後日です。時間は以前と同じようです」

以前と同じ……これは、好都合だわ。朝のうちにしっかり準備して、全力で迎え撃つ――！

「頑張りましょう、アリー――！」

「はい、早速ドレスを選びましょう――！」

こうして二人の打倒！皇帝計画が前よりさらに綿密に練られていくのだった。

4・計画成功！？でもやりすぎたかも…

ついに、陛下の訪問の日だ。

「行くわよ、アリー！」

「はい、リエナ様！」

今日は徹底的にやるつもりだ。それはもう、徹底的に。

こんなことまでして不敬罪に問われないのかと思うかもしれないが、あの陛下のことだ、おそらく悪意のない、しかも小さな嫌がらせに對しては激しく怒りこそすれ、罰則は与えないだろう。たぶん二度と会っては貰えないだろうが。

「いらっしやいませ陛下。私、心待ちにしておりましたのよ？」

笑みを浮かべながら陛下がソファに腰を下ろすのを待つ。

そしてリエナは、皇帝が来るのを心待ちにしていたこと、その間どれほど寂しかったか、さらには皇帝の訪いに備えてたくさんのおドレスやアクセサリーを新調したことを長々と嫌がらせのごとく語った。

「陛下、申し訳ございませんでしたわ。お茶をどうぞ」

そろそろ喉が渴いたであろうタイミングで出てくるのは、またもや皇帝の嫌いなお茶。

皇帝は全く手をつけようとせず、静かにリエナの方を見ていたかと

思うと、その端正な顔に笑みを浮かべた。

うわゝ。こんな表情初めて見た。

普段にこりとも笑わない皇帝が笑みを見せた。

……て、一度しか会ってない女に心を許しすぎではないか？

油断も隙もないと思っていた皇帝だが、女に対しては隙だらけだ。

……この国の将来がとても心配になってきた。傾国の美女とやらが現れれば、この国は崩壊しかねない。

自分は関係ないが、大切な公爵夫妻に迷惑がかかるのは避けたい。国が潰れたときには逃げるのだけは手伝ってあげようと思うリエナであつた。

そんな思考から現実へと戻ってくると、自分の目の前に何かが差し出されていることに気付く。

「驚いたか？贈り物だ」

皇帝の手にあつたのは、古代史の専門書だった。

欲しい！物凄く欲しい。

だが、そんな素振りを見せるわけにはいかない。

リエナはそれを受け取ると、全く興味がなさそうにサイドテーブルに置いた。

皇帝の眉がぴくりと動く。皇帝は完全に気分を害したようだ。

ここで一気に皇帝を怒らせてしまおう。

「ありがとうございます。皇帝陛下に贈り物を頂けるなんて……ですが私、もっと欲しいものがあるんですの」

そう言つて、皇帝に手を伸ばす。その腕に触れると、媚びるような視線で皇帝を見つめる。

「今日の夜も……来ていただけませんか？」

皇帝は怒りの形相でリエナの手を振り払い、ソファから立ち上がった。

「お前が、そんな女だとは思わなかった。幻滅した」

皇帝は冷たい視線でリエナを射ぬく。その後に、侮蔑の表情を浮かべると扉の方に歩き出した。

とどめの一撃!!!

「お待ちください、陛下」

リエナは皇帝を引き留めるために袖を掴んだ。

「次はいつ来てくださるの？」

ばんっ！

リエナの体に激しい衝撃が走る。

「愚かな女だ。俺に殺されることを光栄に思え」

皇帝は、嘲笑を浮かべると扉を閉め、去って行った。

「いったゝ」

皇帝によって壁に叩きつけられたリエナは、よろよろと立ち上がり、振り返った。

「どうするのよ、これ。壁が壊れちゃったじゃない」

リエナが先程までいた場所には、大きな穴が空いていた。さらに周りにはヒビが入っている。

リエナはすぐに立っていられなくなって、すとその場に座りこんだ。

頭からは紅い鮮血が流れている。骨も何本か折れているに違いない。

「リエナ様！血が……」

アリーが慌てて駆け寄ってきた。その目には、涙を浮かべていた。嗚咽を漏らしながらも、リエナの怪我の手当てを必死に行う。

リエナはぱさりとウィッグをとった。

「皇帝……絶対、許さないわ」

「あれ、陛下。もう帰っていらしたのですか？」

お気に入りの女性のもとに行っていた皇帝は、短い時間で帰ってきた。

「俺が馬鹿だった。後宮にまともな女など、いる筈もなかったのに」

皇帝は自嘲的な笑みを浮かべた。

「古代史が好きな振りをしていたのは、俺に気に入られるための演技だったらしい」

やはり、皇帝のお気には召さなかったか。

「あの女、穢らわしい手で俺に触れやがって。まあ、もう生きていないと思うがな。魔法を使ったから」

皇帝が、魔法を使った——それは、死を意味する。皇帝の強すぎる魔法を受けて生きていた者など、未だかつていない。

宰相の顔が途端に蒼白に変わる。

「なっ、陛下、有力家のご令嬢だったらどうするつもりです？」

「そもそも賢い家なら俺の性格を知っているから、女を送り込むような真似はしない。馬鹿な貴族の家一つぐらいだったら、どうとでも出来る」

その通りなのだ。

皇帝の信頼する優秀な臣下たちは愚かな真似をして皇帝の気分を害するようない。

特に、公爵家は皇帝から絶大な信頼を得ている。普段は温厚な性格だが、皇帝に匹敵する手腕を持っている。宰相は、彼が敵ではなくて良かったと皇帝が言っていたのを思い出す。

だが、現当主は皇帝を認めており、臣下として全力で彼を支えている。

彼の家に令嬢がいたらと何度願ったことが。

「取り敢えず、念のために彼女のことは調べておきます」

こうして、皇帝の二度目の訪問は幕を下ろした。

5・リエナの目標は皇帝陛下への嫌がらせに変更されました

怪我をしてからは大変だった。骨折は肋骨一本だけなので助かったが、頭の怪我をどうしようか。

黒髪を隠すためには宮廷の医者に診て貰うわけにもいかず、かといって魔法が禁止されている後宮で魔法での治癒はできない。止血と消毒は行っているものの、適切な治療が受けられず傷は開いたままなので、回復はかなり遅くなりそうだ。

「この怪我では夜会は当分欠席するしかないわね」

「そうですね。陛下も、あそこまでやらずとも…」

アリーがリエナのあまりに酷い傷に痛ましい表情を浮かべながら、呟く。

今は部屋の中で黒髪のまま頭に包帯を巻いて過ごすことが多くなっていた。もちろん、人に会うときはその上にウィッグを被る訳だが、蒸れるウィッグは、頭の怪我にはよろしくなさそうだ。

「アリー、その代わりに後宮の女性を集めた茶会をしたいの」

今まで茶会は自分から開くことなどなかった。自分が皇帝に嫌われるために茶会は関係ないと思っていたからだ。誘われることは何度かあったが、皇妃の有力候補の誘いだけ受けて、後は人間関係に波風が立たない程度に放っておいた。

「茶会…ですか？お怪我をなされていますのに」

アリーが心配そうに問う。

実際これは重傷だと思うが、以前はこんな怪我はいくらでもしていた。……もっとも、そんな時はすぐに治癒魔法で治すことができたのだが。

「夜会に出席できない分、他で補わないと。あの陛下、どん底まで突き落として人間不信にしてあげる」

アリーを泣かせた罪は重い。リエナにとって彼女は唯一無二の存在である。彼女を悲しませたことは、万死に値する。

既に「皇帝に嫌われること」から「皇帝に嫌がらせをすること」に目的が変わっているのだが、リエナは気付かないふりをする。

「さすがリエナ様！私、精一杯サポートさせて頂きますね！」

本気で気づいていない、純粋にリエナを応援するアリーの笑顔に、リエナは俄然やる気を出すのだった。

ある天気の良い午後のこと。中庭には少女たちの明るい声が響いていた。

「まあ、陛下はあのお茶が好きなんですの？」

「はい、逆に甘いものや癖が強いものはお嫌いだそうです。陛下は苦いくらいのものが丁度良いのです」

リエナは今、後宮の美女たちを集めて茶会の最中だ。陛下の理想の女性について指導しているのだが、令嬢たちはリエナの話を聞きたがり、側に集まって来ている。まさに両手に花の状態である。

皇帝陛下の反応が楽しみだわ。

今まで自分にとって嫌な態度しかとってなかった令嬢が、いきなり理想の淑女と化すのだ。しかも、後宮の女性全員が一気に。これ程気持ち悪いことはないだろう。

（皇帝の地位と美貌に）恋する乙女である令嬢たちは、素直に自分の話を聞いてくれる。非常に可愛らしい娘たちだ。

「リエナさんはなぜ、こんなことまで知っていらっしゃるの？」

「ふふつ、秘密の情報網があるの」

柄じゃないけど、悪戯っぽく笑ってみる。自分でやっていて気持ち悪い。

「これから毎日お茶会を開くから、ご予定のない時はぜひ、参加してくださいませね」

「あれから、皇帝陛下の態度が変わりましたの」

「そうね、お優しくなっ たわ」

「これなら夜の訪いもありそうね」

令嬢たちが、嬉しそうに語りながら頬を染める。

茶会を始めてから一週間、リエナの「陛下の理想の女性講座」は侍女などの噂で急速に広まっていき、茶会への参加希望者が殺到していた。

人数が急増した最初こそ困ったものの、リエナは一日に開く茶会の回数を増やしたり、令嬢の予定を聞いて全員が平等に参加できるようにしていた。

だが、他の女性を出し抜こうとして情報を金で買おうとする女性には、参加禁止にしたり厳しい対応をした。

リエナは今や完全に後宮を掌握している。

というか、後宮にはどれだけ人がいるのよ。

後宮には、尋常でない数の女性がいた。歴代の皇帝と比べても、他国の王と比べても、半端なく多い。いくら興味がないからといって、後宮に入る女に制限くらいかけたらどうだ。おそらく皇帝は全ての女性を把握しきれていないだろう。これでは、男が紛れ込もうと、暗殺者が紛れ込もうと絶対に気付かない。

思わぬところに皇帝の弱点を見付けてしまった。今ならだれが皇帝を暗殺しても、犯人は捕まらない気がする。皇帝は強いので、万一成功した場合の話だが。

皇帝といえば……。

そろそろ反応が気になるわね。今の状況をどう思っているのかし

ら？

その頃の執務室。

「宰相、最近後宮の女たちの態度がおかしいのだが」

「……は？それは、どのように？」

「態度に嫌悪を感じない。いつからあんな慎ましい女に変わったのだ」

皇帝は明らかに困惑している様子だった。

「それは良かったではありませんか。これを機に、本気で皇妃選定を考えて頂けると嬉しいのですが」

ついに、女性嫌いを克服したのか。宰相は、嬉しそうににこにここと笑みを浮かべた。

「だが、不審に思わないか？全員、あの態度だぞ？」

「……………」

確かに、いきなり態度が豹変したのは少し気になるところだ。今まで寵を得ようと必死に皇帝に手を伸ばしていた令嬢が、いきなり大人しくなった。これが意味するところは。

「しかも、食べ物や装飾も全て、俺の好みに合わせてあるのだが」

「……………」

なぜ、皇帝と接触がほとんどない後宮の者が皇帝の好みを知っているのか？裏の事情とかならまだしも、好きな食べ物や趣味といった私的な、しかも些細な内容だ。

「俺はどうも、何者かに俺の情報が流用されている気がしてならないのだが」

「私もそう思います」

しかし、そこまで皇帝の事情に詳しい者とは、一体何者なのか。

「陛下、後宮に親しくされている女性など、いらっしやいましたか？」

「……………いる訳ないだろう」

出入りの不自由な後宮の女性と接触できる者というに限られてくる。容疑者候補として上がるのは同じく後宮の女性なのだが、女嫌いの皇帝に限ってそれはない。というか、私的なことで皇帝に関わる者自体、自分以外にまずいないだろう。

「宰相。まさか、お前がしたんではないよな？」

「は？恐れ多くもそんなこと、陛下にできるわけないでしょう」

宰相は突然皇帝から疑いの目を向けられ、ショックを隠しきれない様子だった。

私が皇帝に疑われるなんて……。

宰相の表情に、皇帝は罰の悪そうな表情をした。

「すまない。その通りだな……。このままだと、だれも信用できない。このままでは信頼する臣下までも失ってしまうかもしれない……」

皇帝をよく知る者がこの情報を流しているのだとすると、その者は皇帝の女嫌いを知ってているに違いない。これは、早急に捜査を始めなければ。

「宰相、すぐに情報を集めてくれ。犯人の手で重要な情報が表に出る前に犯人を捕まえろ」

「御意」

かくして、犯人探しが始まったのだった。

6・犯人は逃亡しました

「陛下、私最近語学を勉強し始めましたの」

「……………」

いらいらいら。

「私、陛下のお好きなお茶をお持ちしましたわ」

「……………」

いらいらいらいらいら。

「陛下、私例え財と地位全てを失おうとも、陛下に生涯お仕え致します」

「……………」

ぷちっ！

いい加減にしてくれ！！誰だ、俺の個人情報流している奴は。

ついに堪忍袋の緒が切れた皇帝。

だが、それを隠しつつ、令嬢に優しく話しかける。その穏やかな表情からは、いつもの女性に対する冷たさなど欠片も感じさせない。

「最近、変わったな」

「何か、陛下のお気に障りましたか？」

令嬢が恐る恐る問う。

ちなみに、これもリエナ仕込みだ。この場面で、そうです私とっても綺麗になったでしょう陛下などと言うのは、皇帝の理想に反する。皇帝は控えめな女性が好き（リエナ・リサーチより）なので。

「いや、とても綺麗になった」

皇帝は全ての美姫を魅了する笑みを浮かべて言った。思い通り、令嬢は顔を赤らめて俯く。

「その……陛下のために努力致しましたの」

「俺の好みまで把握してくれているとは、嬉しいものだ。こんなことまでどうやって調べたんだ？」

「はい、最近陛下に身も心も尽くしたいという者で、茶会を開いておりますの」

茶会……そこに、この後宮全体を巻き込んだ事件の手がかりがあるのだろうか。

「リエナ様、効果は絶大のようですよ！！」

アリーが先程令嬢と面会を終えた皇帝とすれ違ったようだが、とてもイライラしていたらしい。

リエナも最近皇帝を見かけたが、幾分か疲れているようだった。こ

の作戦が効いているのだと期待している。あの姿を見た時は二人で喜んだものだ。ささやかだが、お祝いのパーティーまでしてしまっただ。

「ですが、陛下もそろそろ捜査に乗り出しているようです」

「そうね、潮時かしら。そろそろ怪我を理由に実家に帰らせて貰おうかしらね」

実は、怪我の治りが良くない。一向に回復の兆しはなくいつ体調を崩すかわからないのに、これ以上後宮にいるのは危険だ。貧血で倒れて後宮の医者に診察してもらうなどという馬鹿な事態はなんとしても避けなければならない。

「それに、資金調達しなきゃまずいしね」

リエナの後宮での生活資金はすべて自腹だ。公爵家に出して貰っているとかではなく、本当に自分で稼いでそれをドレスなどに費やしていた。公爵家にお世話になっている間に必死に稼いだお金だ。それがこんなドレスに消えていくかと思うと、涙が止まらない。

さて、この事実がバレてしまうと皇帝の「慎ましい女」に当てはまるわけだが、そこは心配いらぬ。後宮の女性には後見というものが付いていて、お金はそこから出して貰う女性も多い。だから、後宮のお金を使用していなくても、お金を使っていないと判断されることはない。

さすがのリエナも、国庫を減らすような大それたことはしない。それをしたら皇帝は困るに違いないが、一番に被害を被るのは国民だ。仮にも公爵家の一員として、民は大切にしなければならない。

「じゃあ、私は申請して参りますね」

アリーは公爵家に帰れる嬉しさに、部屋を飛び出して行った。

申請を終えたアリーが息を切らして戻って来た。「リエナ様！」と言いながら勢い良く扉を開け放つ。

またか。今度は何が起きたというのだ。アリーは優秀な侍女だと思うが、もう少し落ち着いて行動して欲しいものだ。

「リエナ様、びっくりな話があるのです！！なんと、リエナ様死んだことになっているみたいです」

「……………は、どういうこと？」

「陛下の魔法を受けて死んでいるそうです」

どうやら、私は死んでいるらしい。だが、よく考えたら生きている方がおかしいのだ。皇帝の藍色の髪は神に近い色とされ、神の加護があるらしい。神の加護とは、具体的に言えば強い魔力を持っていることだ。つまり、普通に考えれば、皇帝の尋常でない魔力で攻撃を受けて生きているわけがない。

「それって、里帰り申請出来ないんじゃない？」

まさかの事態に顔を青くするが、それは杞憂に終わった。

「大丈夫です。普通にできました！！」

どうやら、後宮の管理はとってもいい加減らしい。あの皇帝のことだから出て行く者は勝手に出て行けとでも思っているのだろう。大丈夫か、この国は。

「ま、帰れるならいつか」

これなら実質いないことになってるから出入りも簡単だし、夜会の出席も自由だ。

なんと言っても最大のメリットは、情報収集に気を遣わなくて良い点だ。もし何らかの失態を犯しても、死んでいる者は捜査対象に含まれない。現に今、皇帝は情報を流した犯人を捜索中だが、たぶん特定されることはないだろう。

つまり、リエナにとって困ることなど一つもない。むしろ良いことづくめだ。

「じゃあ、早速里帰りの準備ね」

準備といってもそれほどすることはないが。ドレスは一度着たら売っているし、大事なものは全て公爵家に置いてある。

「そうですね。リエナ様、帰ったらマシな服を着ましようね」

二人とも、目に痛い色合いのドレスを見ることが、金の調度品を見ることがもう、うんざりだった。

こうして、皇帝に気づかれぬまま事件の犯人は逃亡に成功した。

6 ・ 犯人は逃亡しました（後書き）

とてもたくさんの人に読んでいただけて嬉しいです。これからこの作品をどうかよろしくお願いします。

7．帰郷の目的

「まあ、お帰りなさいリエナちゃん」

公爵家に戻ると、奥様が温かく出迎えてくれる。リエナをぎゅっと抱きしめ、その頭を優しく撫でた。

「ただいま帰りました、奥方様」

リエナも抱擁を返し、にこりと笑った。

「もう、お母さんと呼んでって言うてるのに」

口を尖らせてそう言う奥方様は、本当の家族のようにリエナに接してくれる。

異世界トリップ後、誰も信用できなくて荒れまくっていたリエナを当主が保護し、奥方様が世話をしてくださった。

奥方様は、リエナが使用人を警戒し近付けようとしないことを知ると、自らリエナの世話を買って出て一生懸命心を通わせようとした。あの時の恩は、一生かけても返せないくらいだ。

「ああ、久しぶりだなリエナ」

低くて心地の良い声にリエナが振り返ると、そこには綺麗な容姿の男性が立っていた。

「お久しぶりです、次期公爵家当主様」

彼は普段家にいないのであまり接したことがないが、リエナが養女として公爵家の一員になったときは心から喜んでくれた。彼は王城で働いているらしく、後宮にいるリエナをサポートしてくれる。

「せっかく家に帰ってきたのだから、ゆっくりしていけ」

「はい」

リエナは自然に笑みを漏らした。

「宰相、犯人の情報は？」

皇帝は、執務室に戻ってくるなり宰相に問う。

「ありません」

舌打ちした皇帝に、宰相は眉をひそめた。

そもそも後宮など放っておけと命令した皇帝が悪いのに、自分がこんな態度を取られる理由はない。

全く情報がない状況から、果てしない数の女性のことを調べるといふのは、どんな優秀な者でも無理だ。せめて、後宮に入った貴族の令嬢の情報だけでも管理しておいて欲しかった。

「陛下こそ、茶会に犯人がいると仰って自信満々でいましたね？」

「いなかった。誰も主犯格らしき者は見つからなかったのだ」

皇帝は、イライラしながら机を叩く。

誰か率先して情報を提供している者がいたかと問われれば、否だ。茶会は確かに令嬢の情報交換の場ではあるものの、飛び交う情報に不審な点はない。

もしくは出席していなかったのか？だが、たまたま出席していないのか、それとも皇帝自ら茶会に来ると知って身を隠したのか。後者だとすれば非常に厄介だ。

「陛下、何か恨まれるようなことをした覚えは？」

宰相が何か思案する風にして顎に手を当てながら尋ねた。

「この地位にいる限り恨まれることなどいくらでもある」

馬鹿馬鹿しい問いだ、と言わんばかりに皇帝が答える。

「そうではなく、個人的に恨まれるようなことをしましたかと私は聞きたいのです」

「……何？」

「例えば、先日亡くなられた令嬢のご家族などは？」

——あなたに娘を殺されたこと、とても怒っているかもしれない
せんよ？

「まさか……」

そんなはずは……。そもそも、死体処理もされたかどうかわからないのに、当家に令嬢の死亡が伝わっているだろうか？

「こんな後宮で情報が漏れない方がおかしいです。興味のない陛下はご存じないかもしれませんが、現在の後宮の管理体制はずさんなものです」

宰相が呆れたように言った。

「なぜ、それを早く言わない？」

皇帝がジロリと宰相を睨む。

「何度も進言しましたが、聞く耳を持たなかったのは陛下のほうでしょう」

完全に皇帝の管理下にある後宮だけは、宰相が干渉することはできない。政治ならある程度は皇帝に内緒で手を打つことも可能なのだが。後宮に何か問題があれば宰相は、皇帝に進言するしか方法は無いのだ。

「まったく面倒な……。後宮を廃したいくらいだ」

「犯人が見つかるまで我慢して下さいね」

「それで……リエナちゃんは何で帰ってきたの？」

奥様がにこにこしながら尋ねてくる。

ここは、公爵邸の中庭だった。奥様に長男、さらに仕事を終えて合流した当主も加わってお茶会が開かれている。

「ちょっと……家族に会いたくなつて」

「嘘だろう。いつからそんな可愛らしい性格になつたんだ？」

「嘘ね。リエナちゃんは一瞬も早くもこの世界に帰りたいて思つてるのに、余程の事がないと帰つてこないわ」

「リエナ、正直に言いなさい」

……すぐにバレてしまいました。何でわかるんだ？

「えっと、その……療養のための里帰りです」

「療養？どこか、悪いのか？」

当主様の厳しい視線に耐えられなくなり、リエナは俯いた。

「アリー、説明なさい」

「はい、えと、あの……ですね、……リエナ様が……」

いきなり話を振られ、アリーはあたふたする。口から出る言葉は、途切れ途切れで文章になつていない。

「父上と母上、二人が怯えていますよ。……で、結局どこが悪いんだ？」

追い詰められてうまく言葉の紡げないリエナとアリーに次期当主が助け船を出す。その瞳は優しげだ。

「頭です！頭が悪いんです！」

「「「……………」」」」

完全にテンパったアリーの発言のせいで、その場に何とも言えない空気が漂う。

「アリー、嘘つくなら、もっと上手くやりなさい」

奥さまから同情の視線。

「違います。そうではなくて……」

ふいに、長男が席を立った。

ぽすっ。

「……………」あ

彼の手には、リエナ的茶髪ウィッグが。彼女の艶やかな黒髪と、真っ白な包帯が現れた。包帯には血が滲んで非常に痛々しい。

「父上、魔術師の手配を……」

冷静沈着な息子は、治癒のために魔術師を呼ぼうとするのだが……。

「きゃー、リエナちゃん！！酷い怪我よ」

「大怪我じゃないか！！医師を、いややっぱり、領内で一番の腕の医師を」

茶会はあっという間に大騒ぎになってしまった。

「……で、結局どういうことなの？」

治療を終えたリエナに、奥方様が詰め寄ってきた。まるで肉食獣が獲物を狙うかのように、その目は鋭く光っている。

リエナはついに観念し、今までの経緯を洗いざらい話した。それはもう、何から何まで事細かに。

「ふゝん。皇帝陛下ってそんな性格なんだ」

お、奥様……目が怖いです。

「それにしても、女の子殺そうとするとはねえ」

奥方様が怒っています。

このままだと、彼女が皇帝に逆襲するのは目に見えている。自分としては穏便に事を収めて、静かな後宮生活に戻りたい。このままでは、折角いないことになっていたはずのリエナの存在が知られてしまう。

「お、奥方様！その、私も皇帝陛下を怒らせるような真似をしたのが悪かったですし」

「リエナちゃんは心配しなくて良いのよ。ちゃんと被害が及ばな

いようにしてあげるから」

「そうではなく……」

「ちょっとお仕置きしてあげましょう」

につこりと微笑んだ奥方様の顔は、美しくも怖かった。

8・ お金は何より大切（前書き）

すみません、現在期末レポートを一日に3つ以上仕上げなければならない地獄の状態ですので、次回の更新は遅くなります。

8 . お金は何より大切

ここは、悩める男二人が集う執務室。

はあ……………。

二人同時に溜め息を吐き、顔を見合わせた。

「陛下、最近公爵家からの風当たりが強いのですが、心当たりは？」

「奇遇だな、俺もそのことを考えていた。宰相こそ、心当たりは？」

皇帝は疲れたような表情で、宰相に視線を向けた。

「さあ、わかりません……………ですが、私たちは余程のことをしたようですね。最近、殺気を感じるのですが」

「そうか。俺は最近、護衛に暗殺者を野放しにされているのだが、何度襲われかけたか」

二人とも、辛い経験を思い返して遠い目をしている。

宰相は、今後のことを考えると頭が痛くなりそうだった。

公爵家を敵に回したということは、これからの日々が容易に思いやられる。たぶん、自分は陛下共々屍になっているかもしれない。いや、王位を篡奪されて無人島に追放されるかもしれない。それとも……………。

はあ……………。

また二人揃って溜め息を吐く。

宰相と皇帝は今までにない事態によって、精神的に追い詰められていた。

「くそつ、逃げるぞ」

分が悪いと判断をしたリーダーらしき男は、手下の者たちに指示を出す。

「逃がさないわよ、覚悟しなさい」

リエナはお金稼ぎのために町に繰り出していた。

今日の仕事は町で暴れているゴロツキの捕縛だった。どうやら、意外に強いらしく地元の警備団では相手ができなかったらしい。彼らは、強盗、恐喝、暴行、窃盗などの罪を犯しているらしく、結構名が知れている。

リエナは逃げようと背を向けた男たちを見て、笑った。

男たちは、リエナの笑みの意味など何も知らずに走り出すと……

「うわあああああー!!」

男たちから悲鳴が上がる。後ろにいるリエナに気をとられていた男たちは、まさに前方不注意の状態で、それが彼らにとっての命取りとなった。

「らっき。捕獲完了！」

リエナの目の前には、大きな穴がぽっかり空いていた。そして、その穴の中には泥まみれになった男たちの姿が。

「いや、助かったよ。あいつらなかなか捕まなくてさあ」

ここは、いわゆる傭兵ギルドというやつだ。正直、ブルジョアか？
つてくらいめっちゃ儲かる。仕事としては、商人の警護とか、盗賊
やら山賊やらの討伐……なんだけど、一番簡単なものだと、おつか
いとか掃除とか畑仕事とか害虫駆除とかそんなものである。

「ほれ、今日の報酬だ」

手渡されたのは、何枚かの硬貨だった。

今日は病み上がりなので、簡単な仕事しか引き受けなかったが、い
つもは大量に依頼を受けて一日で大枚を稼ぐのが日常だ。

この調子なら、後宮のドレス代が十分稼げそう！

リエナはお金を貰うと、ほくほくとしながら帰途についた。

「ただいま帰りました」

リエナが帰宅すると、中庭から賑やかな声が聞こえてきた。どうや
ら茶会が行われているらしい。奥方様は家族を集めてよく茶会を開

いているから、おそらくそれだ。

「聞いてくれる？あの陛下、護衛が動いてくれなくて精神疲労が酷いもんだわ」

「うわぁ。せっかくの美形が台無しですね!!」

アリーの声が聞こえてきた。なぜかアリーも参加しているようだ。

「先日は、暗殺者の攻撃を避けた際に転んでたね」

最近、暗殺者に加え、城に人をやって皇帝の様子を毎日報告させている当主様は語る。

「俺は、暗殺者と間違えて忠臣を殺しそうになった陛下を見た」

最後に、城勤めで皇帝の近くにいた次期当主が。

「……………」

私は、何か、非常に、まずいことを聞いてしまった気がする。
リエナは、聞かなかったことにして立ち去ろうとするが……。

「おかえりなさいませ、リエナ様」

「あら。お帰り、リエナちゃん」

奥方様とアリーに見つかってしまった。

「リエナちゃん、さっきまで私たちね、陛下のお話ししてたのよ」

……はい、知ってます。まさか扉の向こうで盗み聞きしていたとは言えないが。

「これならリエナ様も陛下に嫌われますね！」

その通りです。今まで、どれだけ自分のしていた事が生ぬるいか身を以て知りました。

「さてと、お仕置きはこれからね」

目を爛々と光らせている公爵家一家は、恐ろしいものでした。……あ、自分も公爵家の一員だった。

「リエナ、ちょっといいか？」

「はい、次の依頼ですか？」

貪欲に依頼を求め、詰め寄ってくるリエナに、ちょっと引きぎみになる男。

「ああ……ちなみに、報酬は今までの倍だ」

倍！……なんて魅惑的な言葉……！！

リエナの目はきらきらと輝いていた。

だが、次に語られることは、お金儲けで上機嫌なリエナを、地獄に突き落とすことになる。

「実は、皇帝陛下の護衛を頼みたいんだが」

「……………」

……やなことを聞いた。何だこの偶然。不幸としか言いようがない。

「東の町の方で視察があるらしくて、腕の立つものを寄越して欲しいと」

視察という、王宮の護衛官でも事足りる仕事をギルドに依頼したのはたぶん、公爵家のせいで護衛が役に立たなくなったからであろう。

「やっぱり、お断りします」

帰ろうと身を翻すりエナの腕を、男はすぐるように両手で掴む。

「頼む！！皆強いものが出払っていて、お前しかいないんだ」

「私と同レベルのランクの人なんて、いっぱいいるでしょう」

リエナはランクの昇格試験を受けていないし、簡単な仕事ばかりを好んで選んでいたためにランクはあまり高くない。

「言うておくが、実力的にお前に敵う奴なんぞ、そうはいないぞ。それに、一番信用できるのは、お前だ」

「とりあえず、私はやりません」

「お願いだ！この依頼を成功させたら、お前に優先的に仕事を紹介

してやるから!!」

リエナは目を見開いた。

ここで、頷いてしまったのは仕方がない。人間、お金の力には勝てないのだから。

たぶん、変装して行けばたかが妾の顔なんぞ皇帝は覚えていないだろう。……そう樂觀的に考えていたリエナは、仕事を引き受けることにしたのだった。

9．なんでこうなる！？

ついに皇帝の護衛に向かう時が来た。

リエナはいつものウィッグを外し、短い黒髪を金髪に染めていた……念には念を入れて眉も丁寧に染めた。さらに、魔力の質からリエナと特定されないために、魔力を完全に封じた。魔力というのは誰にでも備わっているものであり、たとえ微量だとしても魔力の才に恵まれた皇帝が気付かないはずはないのだ。

指定された場所に行くと、既に準備を整えた皇帝が。

いつ見てもキラキラしているなあ。

そんな感想を抱きながら皇帝の顔を見ると、不機嫌そうな様子が伺えた。……何故？

「お前がギルドから派遣された者か？」

「はい、ナツと申します。よろしく願います」

ナツとは、ギルドで使っている名前である。ギルドでは、ギルドだけで使う名前を持っている者も多い。

公爵家の皆にもとくに忘れられているであろう、夏川里菜という本名からナツにしたのだ。希望としては、男と勘違いして欲しいのだが。

「身分証明を」

リエナはギルドの身分証明を見せた。ギルドの身分証明は名前とランクが書かれている。

「ふん……やはりな。残念ながら、お前には帰って貰う」

皇帝の顔は厳しいものだった。

意味がわからずリエナが突っ立っていると、皇帝が理由を語り出した。

「俺が依頼したのは上位ランクの者だ。身分証明を見せてもらったのは、お前みたいな少年が上位ランクのはずがないと思ったからだ」

あ、そういうことか。てか、男装大作戦大成功。

不機嫌である理由がわかった。つまり、皇帝は、要求したよりも実力の低い傭兵をよこされたことに怒っているのだ。相応の金を払っているのだから、相応の腕の者をよこせ、ということだ。リエナだって、そんなことをされたら怒るに違いない。

だが、ここで引き下がるわけにはいかない。これを成功させれば、リエナは仕事の優遇が約束される。

「私を選んだのは、マスターです」

リエナはそう言い放った。

つまりは、他でもないギルドの最高権力者が選んだのだから、実力がないはずがないということをお願いしたいのだ。マスターはギルドを取り仕切っているだけでなく、傭兵として最強の実力を持っている。普段は傭兵として働いてはいないが。

さて、これで皇帝も認めざるをえないだろう。自分の言ったことは、

皇帝に対して非常に無礼な態度だとわかってる。しかし、ここま
で言わなければ皇帝を納得させることはできない。

「……わかった。だが、実力がないと判断した時点で帰らせるから
な」

皇帝がしぶしぶといった感じで頷いた。

今日は、商業都市の視察に行くとかで、日帰りの予定だ。そうでな
いとリエナは引き受けない。長期依頼は絶対に受けない。

護衛なのになぜか馬車の中に同行し、皇帝の傍に控えている。

「あの、外を見張らなくてよろしいのでしょうか」

「守りの要はお前だ。俺から離れていたのでは、いざという時間に
合わないだろう」

リエナが問うと、皇帝は親切にも答えてくれた。女性への態度とは
大違いだな、おい！！とツツコミたくなるが、押しとどめる。

先程の答えに、なるほど、と思う。今の皇帝の護衛は、公爵家のせ
いで役立たずだ。その者たちを身辺に配置して、リエナを見張りの
一人として外に配置しても意味がないわけだ。

こういう時は正常に頭が働くのに、女性のことになるとなんであんな
馬鹿なのかな。

失礼だがもつともなことをリエナが考えていると、どうやら敵が来たようだ。

リエナは皇帝の前に立ち、ナイフを構えて敵を待つ。護衛対象の位置を正確に確認しようと振り向くと、あるうことか皇帝も武器を構えている。

「陛下はお下がりください!!」

リエナが叫ぶが、皇帝は聞く耳を持たない。

「それでも腕は立つ」

くっ……このままでは、戦えない——訳はない。リエナ・リサイチのおかげで、皇帝の行動なんてとづくに予測済みだ。

さて、と。どの作戦で行こうかな。

リエナは敵の位置を確認する。屋根の上に一人、両サイドに一人ずつ。

皇帝の行動も手にとるようにわかるが、暗殺者の行動も簡単にわかる。

……だって、うちの暗殺者だもん。

これらは確実に公爵家当主が放った者たちだ。皇帝に対する嫌がらせは、まだ続いていたらしい。

それにしても、さすがにうちの者を殺すわけにはいかない。そんなことがバレた父に怒られることは明白だ。

リエナはナイフを2本ずつ交差させるように両脇に投げた。だが、

暗殺者たちはナイフを易々と避ける。ナイフは背後の木に刺さった。

「畏に引つかかったね」（一応少年口調を装う）

リエナの声に暗殺者たちは慌ててその場を動かうとする。

「無駄だよ」

リエナが言うと、暗殺者の腕が突然朱に染まる。

実は、ナイフの柄からは殺傷能力の高いワイヤーが伸びていたのだ。そんなものすぐにわかりそうだが、よく見ないと視認は難しいという厄介な代物だ。木に縫い止められぴんと張ったそれは、人を傷つけるのには充分だった。

2人の相手をしている間に、皇帝の方にもう一人が迫っていた。リエナは身を翻し、皇帝と暗殺者の間に滑り込む。

キン、と金属の触れ合う音が響いた。

力で押してくる暗殺者の剣を、リエナは振り払う。

「ぐっ」

暗殺者が呻き声を上げる。

リエナのワイヤーが当たったのだ。

「おい、後ろ！！」

皇帝が声をあげるので振り返ると、先程の2人が武器を持ってリエナに襲いかかるうとしていた。

しかし――。

「甘いね」

暗殺者は、その場でくずおれた。

ワイヤーには、痺れ薬が塗ってあったのだ。

ふふっ、作戦成功。

暗殺者は全員動けなくなっていた。だが、ほとんど傷を付けぬまま捕縛することができた。あれくらいの怪我なら仕事に復帰するのに時間はかからないだろう。

こうして、暗殺者の襲撃を見事に防いだのだった。

再び、馬車は目的地に向かって走り出した。

しーん。

馬車の中には沈黙が広がっていた。

一番身分の高い皇帝が喋らないのだから、自然と静かになる。襲撃の前までよく喋っていたのにどうしたものか、と思わなくもないが、悩んでも仕方がないので放っておいた。

「おい……お前、聞こえているか？」

襲撃者に備え完全に外へ意識を向けていると、皇帝の方から唐突に声をかけてきた。

何だろう、と訝しく思いながらそちらに視線を向ける。
すると、皇帝は予測不可能な行動に出た。

「実力を疑ったりしてすまなかった」

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。

謝った。誰が？——皇帝が。

「その、おやめください。皇帝陛下が謝罪するなんて——」

「いや、依頼者として、派遣された者の実力を疑うなど最低の行為だ」

リエナは慌てていた。今までにない皇帝の一面に驚くばかりで、いつもの冷静さなんて失いかけていた。

皇帝が、貴族の女性以外に対してなら理不尽な態度を取らないことは知っている。だが、後宮の女としてしか皇帝と接する機会がないリエナにとっては驚きだった。

「私たち傭兵は、依頼された仕事は必ず成し遂げます。自分の実力になんからず自負を持っているからこそ、私も貴方に対して失礼とも言える態度を取ってしまいました。こちらこそ、申し訳ありませんでした」

私も素直に謝った。

あちらが真摯な態度を見せるなら、こちらこそそれを返す。

まあ、後宮での嫌がらせは事情が違っけどね。

「ナツは、素晴らしいな。実力もあるし、とても誠実だ」

「そんな、勿体ないお言葉でございます」

心にもないことを言ってみる。政治手腕は凄いと思うが、皇帝に皇族としての敬意は欠片も抱いていない。

「謙遜するな。俺はお前を気に入った。これからも頼むぞ、ナツ」

自分を評価してくれるのは純粹に嬉しい。例え、それが後宮では間違いないリエナの敵となる皇帝であろうとも。

つて、え——これから？

リエナの頭に嫌な予感がよぎった。

このあと、案の定ギルドのマスターから長期間の皇帝の護衛を頼まれることになった。

せっかくの里帰りがああああ——。

10・この状況は身に覚えがあります

長期護衛を任されることになったリエナは王宮に行くはめになっていた。

うつわ、自分で引き受けたとはいえ面倒臭い。

ギルドのマスターには、依頼を受ける代わりにギルドにおいてのさなる優遇の約束をきっちり取り付けてきた。

さて、皇帝陛下の護衛を始めたわけだが……正直に、言おう。

……………楽しくて、仕方がない。

一日中皇帝に張り付いているせいで、皇帝のすべてがわかる。この情報は、リエナ・リサーチに書き込むしかない！！

後宮を抜け出して危険を犯しながら皇帝の観察に行くよりは、はるかに良い。護衛という立場を利用すれば、どんなに側で観察していても文句は言われない。

大いにリエナの打倒！皇帝計画に利用させて貰うつもりで、彼の一拳手一投足を凝視する。

そんなリエナを皇帝は不審に思っただけ。

「何故、そんなに見つめている？」

「いえ、畏れ多くも皇帝陛下のお側にいる機会なんてないので、し

「つまり目に焼き付けておこうと」

嘘は言っていない。皇帝陛下のお側で、（リエナ・リサーチに有用な情報を）目に焼き付けようと思ったのは、事実だ。

そうすると、皇帝はふっと頬を緩めて笑う。

「良ければ、ずっと雇ってやるが？」

「それは都合上できませんので……」

そう、傭兵ナツの都合ではなく、後宮に戻るリエナの都合上無理だ。

「そうか、残念だな。お前のことを気に入っているのに」

皇帝は本当に残念そうに呟く。

「そういうことは、女性に仰られた方が喜ばれますのに」

軽く冗談のつもりで言っただけだったが……。

皇帝を不快にさせてしまったようだ。

「女は嫌いだ」と呟く皇帝の顔には、女性に対する嫌悪と侮蔑の表情が浮かんでいる。

そういえば、皇帝は何故女性を嫌うのか聞いた（盗聴した）ことがなかった。リエナ・リサーチのためにもこの情報は重要だ。

「陛下はなぜ、それほどまでに女性を厭っていらっしゃるのですか？」

「俺は皇帝だ。負担になるだけの妃なんて必要ないと思わないか？」
それでは嫌いな説明になりません……………とは言えず、皇帝を見つめる。

「でも、それでは心が休まる時がございません。妾くらい側に置いて癒されてもいいと思います」

リエナの心の安らぎ（皇帝と顔を合わせなくてもいい）のためにも、特定の女性を作って欲しい思ったのだが……………。

「女では気が休まらない。いつ殺されるか、夜這いされるかわかったものではないからな。隙を見せられない中で癒されはしない」

そういうことらしい。どれだけ腹黒くても、見た目さえ可愛ければ癒されるリエナとは違うらしい。

「正妃であつた俺の母は、早くに亡くなつてな。正妃の座を欲する側妃に命を狙われ続けたせいだ、未だに女を受け入れられない」

なるほど……………トラウマってことか。

うむうむと一人納得するリエナ。案外、皇帝の女嫌いは根深いようだが、正直なところ、理由が普通すぎてつまらなかった。これではリエナ・リサーチに使えない……………。

「さて、この話はおしまいだ。そろそろ休憩にしよう」

そう言ってペンを置くと、執務机からソファへと移動する。

「あ、俺がお茶を淹れます」

リエナは自らティーセットを用意し、紅茶を淹れた。良い香りが執務室に広がった。

茶菓子は侍女さんが持ってきてくれたようで、紅茶と一緒に並べた。

「お前、上手だな。すごく美味しいぞ」

「ありがとうございます」

やった！！皇帝に認めさせたぜ！！

実はこれ、公爵家の奥様から習ったものだった。紅茶を淹れる手順から、茶葉を蒸らす時間など丁寧に教えてもらったのだ。

「旦那様の紅茶くらい、自分で淹れたいと思わない？」と語る奥様は、時折家族にも紅茶を淹れてくれていた。そのせいでリエナの舌は、生半可な紅茶では受け付けなくなっている。

「おや、良い香りがしますね」

入室してきたのは宰相だった。仕事で部屋を出ていたのだが、戻ってきたらしい。

「宰相か。お前もどうだ？ナツの淹れた紅茶はうまいぞ」

「頂きます」

宰相は紅茶を口に含んだ瞬間、驚いた顔をする。

「これは……………美味ですね。完璧に紅茶の味と香りを引き出してい

る」

そこまでお褒めいただけるとは光栄だ。たかが紅茶のことだが。

「陛下、ナツを正式に雇用することを打診しましょう」

……………は？

冗談かと思ったが、宰相は大真面目なようだ。

皇帝が「宰相は紅茶が好きだからな」と笑いながら教えてくれたが、それにしても皇帝の側に置く者をそんな簡単に選んで良いとは思えないのだが。

「傭兵に心を許してはいけませんよ」

リエナは二人にさりげなく諭したが……………。

「陛下は貴方をきつちりと見てから選んでいますよ。仮にも皇帝ですから、信用できない者を側に置くような馬鹿な真似はしませんよ」

そう、宰相に反論されてしまった。

「そんなことを俺たちに忠告する時点でナツは良い奴過ぎる」

陛下に笑われてしまった。

「ですが、傭兵は金を積まれれば、どんな手汚い仕事でもやってくれます。善良な騎士様とは全く違うのですよ？」

「でも、ナツは違うのでしょうか？」

宰相が問う。

「そんなわけ……」

——そんなわけ、ない。

今だって、ナツという立場を利用してリエナ・リサーチに使える情報を集めている。

「俺が認めただから、変な奴を選んだら俺の責任だ」

そう言いながら、皇帝は茶菓子を摘まんで口に運ぼうとした。

——あ。

「陛下、それは毒入りです!!」

思わず叫んでいた。

リエナは必死だったのだが、皇帝を見ると笑みを浮かべていた。

「ほら、ナツはこうやって俺のことを心配してくれるだろう?」

毒味に関しては任務外だ。ナツがそれを指摘しなくて皇帝が倒れたとしても、責任を問われることはない。皇帝は、ナツが毒入り茶菓子の存在に気づいた上でどうするか伺っていたようだ。

「それに、プライベートのことを語ったのも、俺がナツを全面的に信頼しているからに他ならない」

「そこまで信用していただけで光栄です」

皇帝に試されていたことに不機嫌になりつつも取り敢えず、そう返

しておいた。

「では、ナツを正式にここで雇うか」

「良いかもしれませんがね。私は歓迎しますよ。彼は護衛もできますし、紅茶も淹れられる」

「毒味もできるようだしな」

と皇帝が付け加える。

これはまずいかもしれない。

なんか、後宮にいた時と何ら変わらない状況に陥っているような……

……特に、自分の意思とは逆に物事が進んでいくあたりが。

リエナは嫌な予感がして仕方がなかった。

11・弱味を握られるって恐ろしい

最近、妙に視線を感じる。しかも、微妙に殺気が混ざっているのはどうしたことか。

皇帝に仕えるようになってから数日が経過していた。皇帝は初日から変わらずナツを側で働かせ続けている。

その間中感じるのだ、殺気の混じる鋭い視線を。

皇帝の護衛をしている時も、皇帝とお茶している時も、皇帝とチェス（異世界版）を楽しんでいる時も。

しかもそれは、皇帝ではなく自分に向けられているものである。

「ナツ、どうした？」

いつもと違うナツの様子に気付いた皇帝が声をかけてくる。

「いえ、なんでも……………」

リエナは慌てて取り繕う。今は仕事に専念しなければ。私的な問題で皇帝を煩わせるようなことがあってはいけない。

「そうか、気を張りすぎて疲れないようにな」

皇帝はぽん、とリエナの頭の上に手を置いた。自分も随分と気に入られてしまったものだ。

彼は何かと頭を触る癖があるらしい。身長的に手が置きやすい位置にあるからだろうが、上手に紅茶を入られた際には頭を撫でるし、何気なく頭にぽんと手を置くこともある。

そういう時には特に、物凄い殺気を感じるのだ。……………なぜ？

傭兵として色々な仕事をこなしてきた自分を排除しようとする輩は少なからずいるものだが、それとは少し違うらしい。だからしばらくの間は様子見ということで放っておいたのだが、どうにも気になって仕方がなかった。

「ついて来い。話がある」

近衛隊長から呼び出されたのは、ナツが皇帝に雇われ始めてから5日後のことだった。

以前からこうなることは何となく想像がついていた。あの殺気を向けていたのは、近衛隊長だったからだ。

彼は、ナツの扱いに対し、不満を持っていたらしい。

他の護衛が公爵家のせいで皇帝の命令を聞かなくなる中、この近衛隊長だけは主君に忠実であり続けた。護衛が使い物にならなくなつたとわかつたその日から、ろくに睡眠も取らずに全身全霊で皇帝を守り続けていた。

それなのに、皇帝は素性も実力も知れない傭兵を雇い、しかも片時も側から離さないときた。

金次第でいつ自分の敵に回るかわからない傭兵を信賴し、今まで仕えてきた自分の忠誠を理解してくれない皇帝に、直接その憤りをぶつけることは出来ない。だから、それがナツに向けられることは仕方がないと言えよう。

ちなみに、近衛隊長の堅苦しすぎるところが皇帝は苦手らしく、大切な臣下だとは思うものの、打ち解けた間柄にはなれないらしい（リエナ・リサーチより）。

「今から皇帝陛下のお茶の用意をしなくては……」

そう言つて断ろうとしたが、ぎろりと睨まれてしまった。

「それは侍女の仕事だろう。お前の仕事は陛下の護衛だけだ」

つまり、傭兵ごときが余計なことまでするな、と言いたいらしい。

「ですが、毒の混入を防ぐためにも必要だと陛下が仰られて」

「なら私が陛下に許可を取ろう」

そんなこんなで近衛隊長から逃れることは叶わず、結局面白がった皇帝が許可を出してしまった。

やって来たのは近衛隊の訓練場だった。彼の考えていたことはやはり――。

「武器は何でも構わない。俺と手合わせしろ」

そう言い放つと、近衛隊長はいきなり剣を抜き、殺気を放つ。

剣を構えて立つ姿はとても美しい。こうして見ていると本当に様になる。

整った容姿に冷やかな双眸。鍛え上げられたその体軀は、傭兵の目から見ても見事だ。

これで良いとこの貴族の次男坊だと言うのだから、令嬢の人気は相当の者だ。その人気は皇帝には及ばないものの、皇帝に手が届かないと理解した者の一部は、次に彼を狙う。残りの大半は宰相を狙うらしいが。

さて、そんな悠長なことを考えていると、近衛隊長が動いた。

この力をまともに受けるとまずい。そう思ったリエナは、彼の剣筋を見極めてかわす。

だが、さすが近衛隊長。すぐに次の攻撃に移る。

避けきれないと感じたリエナは短剣を取り出し、迫りくる刃を受け流す。

「なかなかやるな。だが、その程度では私には勝てないぞ」

互いに剣を構え直す。緊張した空気が辺りを支配する。

そんな中、ふと、近衛隊長以外の視線を感じてそちらを見る。

そこには、王宮の二階から愉快げに試合の成り行きを見ている皇帝と宰相の姿だった。

……くっ、あの二人、愉しんでいるな。

「何をよそ見している!!」

おっと、危ない。

近衛隊長が斬りかかってきた。リエナは避けようともせずに、ポケットから秘密兵器を取り出した。

「香辛料爆弾をどうぞ」

ぽいつと投げると、見事近衛隊長の顔面に命中。

「くっ、けほっ……」

思いがけない攻撃を受けた近衛隊長は、リエナから視線を外してしまった。まさか、手合わせでこんな卑怯な手段を使われるとは、夢にも思わなかったのだらう。

「はい、終わりです」

リエナは近衛隊長の首筋に短剣を当て、勝利を宣言した。

近衛隊長は、渋々といった感じで自分の負けを認め、剣を納めた。

「きちんとした剣を習ってきた隊長から見ると俺の戦いは卑怯に見えるかもしれませんが、どんなことをしてでも必ず陛下を守ると誓います」

「いや、陛下の命を守るのに手段など関係ない。実力を疑ったりして悪かった」

うわあ、いきなりなんて殊勝な態度だ。

「だが、お前が陛下の邪魔になるようなことがあれば、容赦なく叩き斬る」

———と思ったら、全くの勘違いでした。

まあ、これで彼との確執は消えたはず。リエナがほっと息を吐いて

いると……。

「そういえば、怪我をしていたな。手当てをしてやろう」

……その申し出はありがたいが、一つ、問題がある。

——ナツが、女だということだ。

「いえ、自分でできますから!!」

「遠慮することはない。見せてみる」

リエナは先程の戦闘より緊張し、手にはじつとりと汗をかき始めた。肩から鎖骨の下あたりまでうつすらとある傷は、さすがに人に見せるわけにはいかない。手当てのために脱いだら、即座に女性とわかるだろう。

「あの、本当に……」

——いいです、と断ろうとすると。

怪我をしていない方の肩を掴まれ、すぐ側の椅子に座らされた。近衛隊長は、抵抗するリエナを押さえつけ、上着を脱がし始めた。その途中で、ピタリと手を止める。

「お前……まさか……」

ヤバイ、バレた？

最後までバレてないことを願いながらも、近衛隊長の表情から判断して、その可能性は諦めた方がよいとわかる。

「――女、だな？」

こちらに向けられた鋭い瞳と目を合わせることが出来ず、リエナは目を逸らした。

その様子に、近衛隊長はにやりと笑みを浮かべた。

「さて…この秘密、皇帝陛下に黙っておいてやっても良いが？」

弱味を握られた――！？

異世界に渡って以来、初めて人に隙を見せてしまった。

「傭兵に性別は関係ありません」

「だが、皇帝に露見するのは困るのだろうか？」

悔しいが、その通りだった。女だとわかると、後宮で皇帝と鉢合わせした時に気付かれる可能性が高くなる。ナツは敵国の間者と疑いをかけられても文句は言えない。

えーい、こうなったら――！

リエナは最終兵器を出す決意をした。日本人と言えば、これでしょう。

土・下・座――！

「お願いします、貴方が実は皇帝陛下マニアだなんてことは黙っておきますから――！皇帝陛下に斬られた服を額に入れて大事に保管していることは言いませんから――！！」

「……………何故知っている」

近衛隊長は、目を見開いてこちらを振り向いた。

抜かりはない。

こういった事態に対処できるように、貴族の弱味はきちんと握っている。

「お願いします！皇帝陛下の絵姿を自室の天井や壁いっぱい飾っているだとか、言いませんから」

「おい、落ち着け……」

「皇帝陛下が魔法で壊した陛下の私物を収集しているなんて言いませんし」

「おい……」

「ましてや、巷で流行っている皇帝陛下を題材にした妄想小説の原作者が貴方だなんて絶対に言いません！！！！！」

書いているのは別人らしいが、近衛隊長は間違いなく小説のネタの情報提供者だ。

「わかった、わかったからそれ以上言うな！！！！黙っておいてやるから！！！」

よっしゃ、遂に近衛隊長を攻略したぜ！！

その日以来、近衛隊長はナツに対して殺気を放つことがなくなった
どころか、不用意にナツに会うことを避けてナツにめつきり近付か
なくなつたとさ。

12・筆頭権力者たちの結婚事情

やっと近衛隊長の殺気の件も片付いたと思ったら、新たな事件が発生しました。大問題どころじゃありません。リエナの人生最大のピンチです。

皇帝に付き従って王宮内を歩いていた爽やかな朝のこと。

今は、大臣たちとの会議を終えた皇帝と執務室へ帰っている最中だ。相変わらず皇帝は、その美貌を振り撒きながら（本人は不機嫌なのだが、女性にはそうは見えないらしい）、黙々と歩いていくのだった。

王宮内の女性の、皇帝への傾倒率は凄まじいものだ。ほぼ全員が彼へ恋愛なり憧憬なり少なからず何らかの情を抱いていると言っても過言ではない。

そしていつか、皇帝が自分を見初めてくれると信じているのだ。可哀想な話だが、王宮にいる皇帝以外の男は、女性にとって皇帝を諦めなくてはならなくなった際の保険にしか過ぎない。そのためか、王宮での平均結婚年齢は毎年上がっていくような気がしないでもない。皇帝を狙う女性は勿論だが、どれ程努力しても女性の眼中に入らない男性陣も結婚しない、いや結婚できないからだ。おそらく妃の座を狙う彼女たちは、皇帝がよぼよぼのじいさんになり男としての価値を失うか、皇帝を退位して権力者としての価値がなくなるまで諦めないだろう。

自室の前に着くと、皇帝は何故か立ち止まった。皇帝の後について

ただ足を動かしていたリエナは、目の前の背中にぶつかる寸でこのころで歩みを止めた。

「午前中はもう仕事はないぞ。ゆっくり休むが良い」

「……………はい？」

一日中護衛するのが仕事であるナツには当然休みなどないはずなのに、この皇帝は一体何を言い出すのか。訝しげに視線を送ると、皇帝はニヤリと笑いながら扉を閉めた。

リエナは、突然のことに呆然と扉を見つめるしかなかった。

すると、どこからともなく……。

「キヤアアーーーー！！ナツ様よ！！！！」

嫌な予感がして、リエナがそちらを振り向くと――。

——そこには、皇帝の嫌いな女性の大群が。

「ナツ様、これを受け取って下さいます？」

「あら、ナツ様にはこちらの飾りの方がお似合いよ」

「いえ、ぜひ、私の手作りクッキーを！」

「私のケーキも召し上がって！」

「私の父が主催する夜会の招待状ですわ」

リエナはあつという間に女性たちに囲まれ、てんやわんやの大騒ぎ

となつてしまった。解放される頃には、リエナの精神は限界に達していた。

あの皇帝、人を生け贄に……。

可愛いと思っていた女性が、初めて恐ろしく見えた瞬間だった。

午後、皇帝と宰相にその話をしたところ、腹を抱えて笑われてしまった。

「まあ、私も同じような目に遭いましたし」

「宰相様もですか？」

どうやら、皇帝陛下の覚えもめでたい臣下とあつては、皇帝と結婚出来なかった際の保険になるだけでなく、皇帝の寵愛への足掛かりになるのだという。

「ですが、俺はまだ結婚できる年じゃありませんよ」

リエナは18歳だが、ナツは一応、それより年下の男の子設定なので。

「そんなの、彼女たちにとっては、問題にもなり得ません。その瞳に映るのは、皇帝陛下ただ一人ですから……ね」

恐るべし、皇帝。

誰をも魅了するその能力、もっと何かに活かせないか？女を囲うで

もなく、むしろ女が嫌いな現状では、宝の持ち腐れだ。

「まったく迷惑な話です。陛下が正妃を迎えないせいで、私たちはこんな目に遭うのですから」

「そう言うお前こそ、早く結婚したらどうだ？既婚者なら、煩い女たちも手を出しにくくなるぞ」

そんな軽口を叩きながら、皇帝と宰相はお茶を飲む。二人はよほど仲が良いようだ。

「そういえば、以前こちらに訪問された姫君も陛下をたいそう気に入られておいででしたね。国同士釣り合いますし、正妃になされては？」

「あんな女、誰が娶るか。いくら見た目が良かろうと、性格は最悪だぞ」

「いい加減、世継ぎのことも考えて下さい。この辺で妥協したらどうですか？」

未だ舌戦を繰り返しているが、二人とも結婚の意志はないようだ。国の権力者トップ2がこんなことで良いのか？

結婚と言えば、国同士の繋がりを作るために重要なことだ。身分の高い者の婚姻というと、政略結婚で溢れ返っている。隣の国だって神から遣わされたという黒目黒髪の聖女が王子と婚約している。

ましてやここは大国だ。先代も、先々代の王も婚姻によって繋がりを得ている。そんな中、この皇帝と宰相は、結婚をする意志もないと言う。これはゆゆしき事態だ。

「あの……………お二人の、結婚のご予定は？」

きつと、きつとあるに違いない。結婚までいかなくとも、今お付き合ひしていて、ゆくゆくは……………みたいな人とか。

リエナは恐る恐る二人に尋ねた。

「ない」

「私からです」

きつぱりと二人に言われ、リエナの希望は打ち砕かれた。

ちなみに、近衛隊長には期待していない。あの皇帝大好き野郎が結婚するはずない。どうせ、「私は一生皇帝と共に在ります」とか言うのだろう。

それにしても、二人とも結婚に積極的な様子はないが、それどころか結婚のけの字も感じさせないとは。

いや、そうか。お付き合いまで至らない関係の女性も考慮に入れないくては。それならきつと……………。

「因みに、今狙っている女性などは？」

「いない」

「いませんね」

「……………そうですか」

なんとということだ。

いや、陛下の美貌なら、他国の姫をたぶらかして後宮に入れること

などたやすいはずだ。なのに、自分の好き嫌いだけで、国の利益を無駄にするとはどういうことだ。

何より、リエナの先行きがかかっているのだ。後宮に潜んで日本に帰る方法を探すには、皇帝が寵妃を作らないのも困るし、国が廃れていくのももちろんまずい。

そう思うと、つい叫んでいた。

「何ですか？陛下の美貌を使えば、後宮にどれだけ人質を得られるとお思いですか！面倒臭い政治の駆け引きを繰り返さずとも、貴方がその容姿を活用するだけで利益は何倍にも膨れ上がるのですよ？」

皇帝と宰相は目を丸くしていた。だが次の瞬間、確かにその通りだと笑いだす。

「ナツ、陛下が賢帝と言われるほど政治に力を入れるようになったきっかけをご存じですか？」

「？」

「女性関係にあれこれ言われなかったために、政略結婚に頼らずとも、安定した国を作ろうと考えたからです」

ど、どこまで女嫌いなんだ、この男……。

確かに、この国は今や大国で、他国との関係も概ね上手くいっているし、国全体が豊かで国民は生活に困ることもない。その状況の中で、無理に政略結婚する必要に迫られることはない。豊かになったらなったで結婚を望むものは多いだろうが、国が良ければ政略結婚

を断れるだけの余裕がある。

だが現実問題、皇帝には山のような見合い話が舞い込み、求婚を受け続けている。原因は――。

「陛下の容姿がまずかったとしか言いようがありませんね」

宰相が皇帝に視線を送る。

「ああ、これ程までに自分の容姿を呪ったことはない。後宮なんぞ、さっさと潰したいものだ」

「陛下、今――何と？」

先程の、結婚しない宣言を上回る衝撃的事実をリエナは耳にした。いや、そんなはずはない。皇帝はまだ未婚で、世継ぎもない。そんな状況で後宮をなくすなど、周りが許すはずがない。そうだ、そうに違いな――。

「後宮を、潰すと言った」

先程よりはつきり潰すと言いやがったよ、この皇帝。

「いつになさいます？ きな臭い動きをしている方も増えつつありますし、早めに潰さなくては」

「そうだな、2ヶ月後には後宮の閉鎖を目指したい」

に、2ヶ月後――！？

それだけは、阻止しなければ。

今、王宮から追い出されればリエナは地球に帰還できる可能性が極めて低くなる。なんせ家に帰る頼りとなるものはもう、この王宮にしかないのだから。別に侍女としてもう一度王宮に上がるのもアリだが、妾としての特権はなかなか手放せるものではない。侍女は後宮の女と違って管理が非常に厳しい。それこそ、どここの家の何者か、どここの家と繋がりを持っているか、皇帝に害を為す存在かなど事細かに調べ上げられ、挙げ句の果てには恋人などの関係まで皇帝に筒抜けだというのだから、恐ろしいことこの上ない。まあ、皇帝の世話をするということは後宮の女たちより皇帝に近い位置にいるのだから、仕方がないだろう。

その点、管理がずさんな後宮はどんな身分の者でも、たとえ反逆を企てている反皇帝派の者であっても出入り自由。リエナからすれば、なんて素敵なんだ、後宮最高！！と言いたくなるくらいの素晴らしい環境なのである。

その後宮が、潰れる。そんなことはリエナが許さない。絶対に阻止してやる！！

リエナは、皇帝の護衛を辞めた日には後宮閉鎖を阻止するべく精力的に（皇帝への妨害活動に）動くことを決意するのだった。

12・筆頭権力者たちの結婚事情（後書き）

お久しぶりです。

なかなか更新できなくてすみません。

これからも努力致しますのでどうぞよろしくお願いします。

13・ 皇帝陛下の理想の女性像

後宮廃止。

この事態に、どう対処するべきか。

リエナは執務機の側で、皇帝が書類に向かう姿を眺めつつ、脳内でうーんと唸っていた。

後宮廃止をどうにかしなければならぬ。それはわかっているのだが、リエナにはどうしても腑に落ちない点があった。

「浮かない顔をしているな」

その声にふと現実に戻りそちらを向くと、皇帝はいつの間にかペンを動かす手を止めてこちらを見ていた。

「いえ、陛下と宰相様が結婚をしない理由について悩んでいまして……」

皇帝の隣で書類の分類を行っていた宰相もこちらの会話に耳を傾けていたようで、僅かだがこちらに視線を向けた。

「だから言っただろう、女は煩わしいと」

皇帝の答えに宰相も同意見だとばかりに頷く。

「いえ、どう考えても結婚するより結婚しない方が不利益な気がしまして。結婚すれば口出ししてくる貴族の方も減りますし、既婚者ということで周りからの信頼度は上がります。それに、陛下の嫌いな女性からのお誘いも断れますし……」

「結婚しろ、結婚しろと五月蠅いが、結婚したらしたで今度は世継ぎをと騒がしいだろうが」

「でも、逆に考えれば、子供ができればそれで女性関係からおさらばできます」

すべてにおいて納得がいかない。もとより女性に期待を抱いていないならば、いずれ適当なのを見繕うしかないだろう。なのになぜ皇帝は、この状態を長年放置し妃について口煩く言われ続ける生活を送っているのか。

リエナはどうしても理解できないのだ。

だって、皇帝の言っていることは辻褄があっていない。皇帝もそれに気付いているだろうに、訂正しようともせず、こちらにきちんとした説明をする意志もないらしい。

二人の終わらない問答に見かねた宰相がこちらに助け船を出してきた。

「陛下は、別にいい加減に妃を選ぼうなんて考えていらつしやいませんよ。それどころか、慎重になりすぎているくらいです」

では、何故後宮があんな状態になるのだ。

後宮の女性の数も、湯水のごとく使われているお金についても全く把握していないではないか。

この皇帝は、女性たちが後宮に暗殺者や、情夫までも招き入れていることを知っているのか？毒薬や、武器や、拷問具などまで持ち込んでいることを知っているのか？

後宮内では監視が全くないのを良いことに昼間から私刑や拷問、盗

難、強姦などの犯罪が公然とまかり通っている、治安が貧民街よりも遙かに悪い場所だということを知っているのか？

いい加減でないなどと、何を根拠に言っているのだろう。

「つまりですね、皇帝陛下は女性に対して理想が高すぎるのです。高い理想を持つがゆえに周りの女性に失望してしまうのです」

「ち、因みに陛下の理想の女性像とは？」

周りの女性に失望するほどの理想って、どんな理想だよ？

「それは陛下本人に尋ねてみては？」

につこりと笑顔で返されてしまった。本人に聞くのが何となく憚られる気がして宰相に尋ねたのに。

「そうだな、まず、見た目は外交で好印象を与えられるような感じで」

皇帝は何故か勝手に語り出してくれた。尋ねてもいないのに。

——まあ、いいか。遠慮なくリエナ・リサーチに書き加えさせて貰うことにしよう。

外交で好印象……。

つまり、美人ということか。しかも、万人受けする感じの上品で清潔感のある美人だ。まかり間違っても、マニアックな人にしか需要がない美人ではダメだ。

「性格は？」

「慎ましかで優しく、心の強い人だな。自分勝手にない者が良い」

……へえ。

何と云うか、皇帝に殺意を抱きなくなる。だって、そんな見た目も性格も完璧人間は、はつきり言つて、いな い！！！
そして、そんな居もしない人と比べられ、貶められてきた女性はどれ程可哀想なのか。

「他に、条件はないのですか？」

そう、ちょっと欠点があるのが可愛らしい……みたいな。天然な娘とか、ドジな人とか。

「そうだな、礼儀作法は勿論完璧。人の上に立てるだけのリーダーシップを持った人、しかも博学で、柔軟性に優れた頭脳の持ち主が良い」

どこの大企業の入社条件ですか？随分と厳しいんですね。就職氷河期だから？

しかも、この条件を付けると皇帝陛下、貴方のお嫌いな貴族の女性しか選択肢がなくなるのでは？

「叶うなら、武術や魔法に優れ、自分で身を守る者は良いな」

……もう聞きたくない。聞いた自分が馬鹿だった。

「あと、ナツのように紅茶を上手く淹れられる人がいい」

自分のせいでハードル上がった……！！？

確かに、宰相の言うように、妥協が必要なレベルかもしれない。妥協というか、もはや改心させる必要がある。

「ではなぜ、貴族の女性を嫌うのです。人を使うことに慣れ、教養と作法を身に付けているのは貴族だけです」

思わず宰相がつっこんだ。きっと、長年疑問に思っていたのではないだろうか？

「性格が気に入らない」

見た目は貴族、性格は町娘ってところか？

「ナツみみたいな女がいたら、良いのだけだな」

皇帝がぼつりと呟いたその言葉のせいで、室内はしーんとなった。

「陛下、その発言はさすがに……」

危ない扉を開いてしまいそうです。

そのまま、妃の話は終わってしまった。ナツは勤務時間が終わり、帰宅した。

部屋には、皇帝と宰相の二人だけが残っていた。二人とも、黙々と山積みの書類を片付けていく。

「宰相、ナツは何であんなに俺たちの結婚について気にするんだ？」

「それは、ナツが優しいからでしょう。傭兵といえども、綺麗な心の持ち主です」

「ナツは、何者なんだ？王宮での作法も分かっているし、紅茶を淹れることもできるから、元はどこ良いところの子供だったのではなかったのだが……いくら身边を調べても、一つも情報が出てこない」

皇帝から見てもナツのふとしたしぐさは綺麗で、どこか貴族の立ち居振舞いを思わせる。美しい顔立ちは育ちのよさを感じさせる。きっと生家はそれなりに名のある所なのではないかと思う。

あんなに幼いのに働かなければならないということは、今、彼の家はどんな状況なのだろう。裕福な家庭で大事に育てられた彼が仕事を始めるというのは、さぞかし大変だっただろう。

皇帝は心配になりナツについて調べてみたのだが、ナツの名前は傭兵の中ですら知られていない。ナツの実力はなかなかのもので、知っている人がいないなんてことはないはずなのに。何せ近衛隊長を倒せる實力を持っているのだ。

以前二人が戦った試合は見事だった。ナツは臆する様子もなく余裕の表情で近衛隊長と対峙していた。そんなナツの油断をうまく突いた近衛隊長だったが、ナツは逆にそれを利用して勝利した。……

近衛隊長の剣がナツを掠めた時はひやっとしたが、ナツの実力は計り知れない。まだ誰もその本気を見たことがない。護衛をする際、たとえ何人に囲まれようがナツはその全てを同時に相手にして見せ、常に護衛対象を守ることと忘れない。

あれほどの實力を持った者が他に何人いるだろうか。

「それに、魔力が感じられないのも妙だ」

人には必ず備わっているはずの魔力が感じられない。つまりナツは呪われているか、魔力封じが施されているかのどちらかということになる。

だが、呪いや魔力封じなら、最強の魔力を持つ自分がそれに使われている魔力を感じられないはずがない。いつもなら、魔力を行使した相手を特定することすら可能なのに。

つまり、ナツは自分の理解を超えた方法で魔力を消しているということか。

「ナツは——本当に何者なんだ？」

「さあ、でも私たちの中でその存在が日に日に大きくなっているのは間違いないですね」

明日はナツに休暇を出した。会えないとつまらないと考える自分に二人は驚くのだった。

——その後の皇帝と宰相。

「言っておくが、あの時の発言はそういう意味ではないからな」

「そうですね。私はてっきり陛下が男しょ——」

「それ以上言うな。ただ俺は、ナツやお前みたいに心を許せる女性
がいたら、と思ったただけだ」

「私も心を許せる内に入りますか。光栄ですね」

「当たり前だ。お前が信用できなかったら、俺は誰も信用できない」

「それはそれは。少しは他にも親しい人を作って欲しいのですけれどね。いつか陛下に素敵な女性が現れることを祈っていますよ」

「お前もさつさと誰か娶れよ」

14・ 皇帝と宰相は秘密の相談事？（前書き）

前回の終わり方からしてこのタイトルは……………まずかっ
たかもしれません（笑）

皇帝と宰相の関係は、決してBのLが残念な方向には（まだ？）走
りませんので、ご安心を。

14・皇帝と宰相は秘密の相談事？

リエナは王都の大通りで買い物をしていた。

今日の容姿は地味な町娘風だ。頭はというと、目元が隠れるくらいの前髪でおさげの髪型にセットしたカツラをかぶり、その上からバングナを巻いている。服装はシンプルな白のワンピース。軽くメイクを施し、完成。すっぴんに近いので、元よりそんなに目立たないだろう。

王都内では魔力を漏らすと皇帝に感知されるので、ナツと区別するために今回は封じるのではなく魔力を変質させ、抑制している。

何故、せつかくの休日になぜ王都にいるかというと、明日は兄の誕生日だったので、プレゼントを買いに来ていたのだ。

それにしても、なぜ皇帝は今日を休暇にしたのだろうか。護衛は毎日するものだろうと思うが、自分がいない方が都合が良いことがあるのだろうか？宰相と密談とか。あ、もしかして禁断の扉を開いちやった？ナツはもしかしくなくてもお邪魔だった？

まあ、どうでもいいか。せつかくの休日なのだから、皇帝のことなど忘れて楽しもう。

………と思っていたら、意外と人に声をかけられて、前に進めません。

あれ、地味な町娘設定は失敗？何故か無駄に目立っているんだけど。

「ねえ、君ひとり？」

……なぜそんなことを聞く？私が一人だったら、あなたに不都合なことでも？

「おにーさんが案内してあげようか」

……赤の他人に声をかけるなんて、よっぽど暇なんだな。てか、迷子ではないので道はわかる。案内はいらない。

「一緒に食事行かない？俺、奢るからさ」

……私に食事を奢って何の得になる？

アリーが「色んな人から声をかけられると思うので、気を付けて下さい」と言っていたのは、この事だったのか。思わず誘いに乗って、本来の目的を忘れないように気を付けよう。
アリー、私はちゃんと気を付けてるよ！！

取り敢えず断りつつ歩いていたのだが、ついにラスボス来ました。これはお断りするのが大変そう。

なんか人相が悪そうなオッサン。上半身裸で、汚いズボンをはいている。

「なあ、お嬢ちゃん。オジサンが良いとこ連れて行ってあげるから、一緒に来ないか？」

「いえ、私は忙しいので」

ちよつとどころか本気で遠慮したいので、きつちりと断ったのだが

……。

「そんなこと言わないで、こっちに来いよ」

あろうことか、このおっさんは路地裏にリエナを引き込み始めた。てか、汚い手ね。ちゃんと風呂入ってる？せつかくの町娘衣装が汚れるし、そんなに強く引っ張ったら袖が伸びる。

強引な彼に引っ張られるままに、路地裏へと入っていく。

そのまま周りを建物の壁に囲まれた場所に辿り着き、逃げられないように追い詰められてしまった。

すると彼はあろうことか、大事な町娘衣装に手をかけようとしたのだ。これ、一着しかないのに！！この服を買うためにどれだけ硬貨の両替をしたと思ってるのだ（傭兵業で高額報酬の後だったので、細かいお金がなかった）。一番大きなお金から一番小さなお金まで替えるのは大変だったのに！！

思わず、淑女にあるまじき殴る、という方法を選択しようとしたところ……。

「ぐえっ」

——勝手に、吹っ飛んでいきました。

断じて一度も触れてはいないのだが、大事な服は守れたので、何が起こったか、そんなことはどうでもいい。

「おい、大丈夫か？」

声をかけてきたのは、茶髪の好青年——ではなく、皇帝陛下でした。

魔力でわかる。目の前の容姿は皇帝のものではないが、魔力は間違
いなく彼のもの。

こんなところで何してるの？

と訪ねたい衝動に駆られたが、今はナ
ッではないことを思い出し、別のことを口にする。

「大丈夫です。ありがとうございました」

私の代わりに殴ってくれてありがとうございました。大事な町娘衣
装は無事です。

精一杯の感謝の意をこめて皇帝を見上げると、皇帝は怒りの形相を
していた。

「貴女は、自分が置かれていた状況をわかっていいのか？男に襲わ
れるところだったのだぞ。なぜ、助けを求めない？なぜ、抵抗す
らないんだ？」

あー、そういう状況だったのか。

こんな一般人に負けることは万が一にもないしそもそも殺気がない
ので、いつもと比べてどうしても感覚が鈍くなる。今度から気を付
けよう。

「本当にわかっているのか？」

「わかっていますよ？」

そう、返してみるのだが、まったく信用した様子はない。

「貴女は見ていて非常に危なっかしいな。……………仕方がない、

貴女が買い物をしている間、一緒にいてやる」

全力でお断りします!!!!

「あの、そこまでして頂かなくとも——」

「いや、心配だから一緒にいる」

出た、皇帝の無駄な正義感と国民愛!!

皇帝のいない、せつかくかの休日をたのしもうと思ったのに。何の因果か結局皇帝がいる。

不満に思っていたのだが、皇帝が隣にいと、人に声をかけられないことがわかった。

意外と役に立つのね。

リエナは非常に失礼なことを考えながら、賑やかな町並みの中を歩いていた。

「そういえば、名前は、何と言う?」

「……………」

……………何と名乗ろう。

リエナとナツは勿論使えない。本名は、リエナと同じ発音になってしまう。なぜかこの国の人たちはリナと言えないらしいので。何度

名乗っても発音が「リエナ」となるのだ。

「……………ナナです」

名前の最初と最後をとってみた。

今度から変装時の名前候補リストを作っておこう。取り敢えず、町娘の名前は“ナナ”に決定した。

皇帝は実に紳士的にリエナに接してくれていた。はぐれそうになったら腕を掴んでくれたし、歩き疲れたら定期的に休憩を入れてくれた。

これ、貴族の女性の前でしたら及第点なんだけどな。

これだけの気遣いを見せれば、女性たちは一瞬で落ちるのに。落ちるどころかあまりに幸せすぎて天国に召されるかもしれない。

そんなことを考えていると、前から怪しげな集団が歩いてきた。30人以上で道を塞いでいて、非常に迷惑な存在だ。だが、男たちの恐ろしい雰囲気にもその事を指摘する者はいない。

「ボス、あの男っす！あいつが俺を……………」

そう叫んだのは、先程リエナが殴ろうとして皇帝がぶつとばした、件の男だ。皇帝に殴られた顔は痛々しく腫れており、思わず「わー、可哀想ー」などと、彼に対する憐憫の情が湧いてきたと同時に、滑稽なその顔に声を上げて笑いそうになる（完全に上から目線）。

大笑いしそうになるのを抑え、今の状況を考察してみる。恐らくこれは、自分がやられたことをボスに告げ、キレたボスが登場してくるという、何ともありがちなパターンに違いない。

「へえ、お前か？俺の部下を可愛がってくれたのは」

明らかに山賊か盗賊のお頭っぽい人だ。顔には何創もの傷があり、醜いが凄みのある顔だ。腰には実用的っぽい剣がある。彼の後ろには同様に武器を携えた手下らしき男たちが控えている。どれも顔が同じで区別がつかない。

「ナナに手を出そうとしたから、彼を止めただけだが？」

皇帝はいつもと違う色の瞳で相手を冷ややかに見つめる。今は美形ではないのでその顔から醸し出される鋭利な雰囲気はいつもより緩和されているものの、体から放つ殺気は普段と比べ物にならない。てか、なに勝手に呼び捨てで呼んでるの？

「そうか、じゃあ今から彼女を助けたことを後悔することになるな
！！」

そう言つて、彼らは剣やら棍棒やら、武器を取り出してきた。応戦しようとして皇帝は持っていた剣を構える。

え、私？戦わないけど？

—— だって今は、か弱い町娘設定だし。大事な衣装を汚したくはないし。

そもそも今日は仕事ではない。相手もちょっと悪めのおっさんたちで、命を脅かされる暗殺者や傭兵などの類いではない。

まあ、まずいと思ったら全力で逃げるとしよう。皇帝は自分の命く

らい自分で守るだけの实力はあるだろう。

皇帝は次々に敵を打ち倒していく……が、いくらごろつきと言えども、数が多すぎる。皇帝はなかなか苦戦しているようだ。魔力を使えば一撃なのに。命の保証はできかねるが。……まあ、こんな雑魚に魔力を使いたくないのも理解できるけれど。

そんなこんなしているうちに、ボスがリエナに近付いてきた。

「へえ、なかなかの別嬪じゃねえか」

無理やり頤を持ち上げられ、気持ち悪いボスの顔の方を向かされる。顎にかけられたこの手の臭さから考えると、ボスも風呂には入っていないさそうだ。さっきの雑魚と比べると、臭いもボスクラスってわけか。

ねえ、これってか弱い町娘なら怖がらないといけない場面？

あまりの臭いに鼻がもげそうで、怖がる余裕は欠片もないのだが。殺される前に臭いで死にそうなのだが。

おゝい、皇帝陛下。ピンチですよ。気付いてください。

「彼女に手を出すな!!」

リエナの念が通じたのか、皇帝はこちらに気付き、駆け寄ろうとする。

こういう場面で「手を出すな」と言われてそれに従う奴は、低い知能しか持たない者の中にも、いくら何でもいない。いたとしたらそれは、救いようのない馬鹿だ。たいていの展開は予想がつくだろう

が――。

「女を傷つけられなくては、剣を捨てろ」

はい、こういう展開なわけですね。

リエナは首に短剣を突きつけられる。皇帝はやむ無く剣を捨てた。

「さて、野郎共、ずらかるぞ。女も手に入れたことだし」

「な、彼女を解放してくれるんじゃないのか」

皇帝を見続けてきたリエナには一目で演技だとわかるが、ボスは皇帝の悔しそうな顔に満足げな表情を浮かべる。

「傷付けないと言っただけで、お前に返すとは一言も言っていない」

ボスはリエナを手に入れ皇帝より優位な立場になったのを良いことに、油断し始めた。

「さっさと帰るぞ野郎ども。今日はいいものを手に入れた………な」

その瞬間、ボスが倒れた。どうやら皇帝が油断しまくりで無防備状態のボスの隙(?)について攻撃したらしいので、その間に逃げる。

「ナナ、危ない!!」

振り返ると、ボスを傷つけられたことに逆上し剣を振り上げて襲ってきた相手がいた。皇帝はリエナを庇うように抱きしめ、身体を倒した。

だが、このままでは二人とも危ない。リエナは心の中で舌打ちをし

て、襲いかかってきた男の足を掬った。

男は見事にすつ転び、何とか剣で貫かれることは避けたのだが――

「このっ、ふざけた真似してくれやがって!!!」

――これは火に油を注ぐ結果にしかならなかった。

今度こそ、もうダメかもしれない。そう思っ
てリエナは目を閉じる。
皇帝はリエナを守ろうと、強く抱き締める。

男が剣の柄を振り上げ、突き立てようとしたとき――

――

「そこまでだ!!!王都警備隊だ。全員捕縛させてもらっ

王都の警備隊の者たちが駆けつけ、すぐさま彼らは男たちを捕縛していった。

怖かった……………。

皇帝は自分の命を捨ててまで、あの男たちの命を守ろうとした。絶対に魔力を使おうとはしなかった。

彼の、人を傷つけまいとする意志は堅かった。誰かを守ろうとする思いは強かった。

リエナは、いくら皇帝が国民に優しくても、いざという時は自分の命を優先するだろうと、護衛の際もどこか安心しきっていた。誰だって我が身が可愛いものだ。それに皇帝という誰よりも責任ある立場に在るのだから、そう簡単に我が身を投げ出すような真似はしない……………そう、思っていた。

彼女の護衛の際の余裕は、そんな勝手な憶測によって生み出されて

いたにすぎないのだ。

今までの自分の行動を思い返して思わず身を震わせる。自分はなんて甘い考えだったのか、と。

「大丈夫か？」

皇帝が落ち着かせるようにぽんぽんとリエナの背中を叩く。

だが、震えは止まらず、立ち上がることもできない。自分の過ちによつて失われようとしていたものの大きさを自覚し、その心は恐怖に吞まれそうになる。

今まで幾人もの人を傷付けてきた。それは、生きるためには仕方ないことだと自分の中で割り切っていた。いつか、人を殺す覚悟もしていたつもりだったが、命というものは想像以上に重たいものだった。

14・ 皇帝と宰相は秘密の相談事？（後書き）

前書きの「BのL……」の話は冗談です。一切そんな要素は入りません。

本当に心配された方がいたら申し訳ございません。

15・皇帝の国民愛は自重した方がいい（前書き）

お久しぶりです。

たいした文章でもないのに時間がかかって申し訳ありません。

皆様の感想と評価ポイントで頑張れています。ありがとうございます。

15・皇帝の国民愛は自重した方がいい

さて、事件は収束。

それにしても、このことをあとで振り返ると、今日は未恐ろしいものを見てしまったような気がする。

「立てるか？」

皇帝は手を差し出してきたが、今はほつとしたのか、足に力が入らない。

首を振って、答える。すると、皇帝は非常に申し訳なさそうな顔をして、俯いた。

「すまないな……危険な目に遭わせてしまって。さぞ怖かっただろう」

皇帝は、ナツでいるときにしていたようにリエナの頭をぼんぼんと叩いた。リエナは、その皇帝の何気ない仕草が自分に安心感を与えたのがわかった。

しかし、その安心は次の瞬間には消えうせ、焦りに変わる。

なんと、皇帝はリエナをいきなり抱き上げたのだ。しかも、横抱きで。歩けないリエナに気を遣ってくれたのだろうか、歩けるようになるまで待つてくれるだろうという勝手な予想を裏切る行動をしてくれた。

これは、いわゆるお姫様抱っこ？

皇帝、いくら国民を愛していると言っても、初対面の女性を抱き上

げるのは不味いと思うぞ？

「警備隊の詰め所で手当てをしてもらってから、行こう」

詰め所に着くと、警備隊の方々にニヤニヤした目で見られてしまった。そしてそのまま「お二人でどうぞ」とか訳の解らないことを言われて、休憩室の一室に閉じ込められてしまった。

いや、互いに今日が初対面（本当は違うが）なんだけどもなあ。

医者への到着はもう少し遅れるらしく、二人は部屋で待つこととなった。……………が、なんですか、この雰囲気は。

皇帝は無言で自分の方を向っていて、何も言葉を発しようとしないう。扉の向こうでは野次馬らしき者たちが聞き耳を立てている。

「あの、お怪我は……………」

ついに精神の限界を迎えたりエナは、無難な話題を提供することにした。

「ああ、大丈夫だ」

素っ気ない答え。皇帝はふいと顔を背けてあらぬ方に視線をやる。

……………てか、皇帝、脂汗かいてない？

皇帝の額やこめかみにはだらだらと汗が流れている。暑いのかと思っただけ、顔色は蒼白と言った方が正しいくらいで。もしかして……………。

「あの、お怪我をしているでしょう？私、治癒魔法が使えるので、
看せて下さい」

「いや……………いい」

それ、怪我してるってこと？……………だよな。
そうとわかれば、治療するしかないだろう。

「とにかく、見せて下さい？」

今日は互いに主従関係にないので、容赦はしない。

につこりと笑顔を浮かべると、皇帝は一瞬、目を丸くした。……………
……あれ、何かこの反応、間違ってる？

リエナはその隙に皇帝の上着のボタンに手をかけた。どうやら上腕
の辺りを怪我しているらしいので、そこには触れないように気を付
けないと。

「やめろ！……！」

皇帝がリエナを自身から引き剥がそうとする。が、リエナもここで
引き下がるわけにはいかない。

「いいから、脱いで下さい」

なおも上着を押さえ、抵抗しようとする皇帝。そんなに抵抗され
たら、脱げない理由が逆に気になってしまっではないか。

その時、コンコンとノックの音が響いた。皇帝はその音を確認する
ように、扉の方をちらりと一瞥した。

因みに、先程いつもの癖（侵入者に備えて）で扉の鍵を閉めてしまったので、他の人の入室は困難だ。

今だ！！

一気に皇帝の上着を引っ張り、脱がせる。そのまま下に着ていた服の袖をギリギリまで捲り上げる
そうしてさっさと治癒魔法をかけて捲っていた袖を下ろした。

次の瞬間、リエナは皇帝に押し倒されることとなる。
ちよつと待て、何だこの展開。あらぬ誤解を招きそうなんだけど。

「今、見たか……………」

竦み上がるほどの皇帝の鋭い視線。
正直、リエナはこういう視線には慣れているので何の問題もないのだが。

「え？……………何の話？」

何のことかわからないとばかりに、首をかしげて皇帝を見上げる。

見たか？と言ったのは、皇帝の捲った袖の隙間、肩あたりに見えた、刺青のようなものだろう。皇帝が必死に隠そうとしたもの――

――それはおそらく、呪いだ。

取り敢えず、町娘の立場からすると関係もないので、今は気のせいということにしておこう。

床に押し倒されたリエナの耳に、ぱんっという音が響く。
そういえば忘れていたけど、ここって――。

「おいつ、いちゃつくのもいい加減にしろよ！！ここがどこだかわかってんのか？」

ここは休憩室だということが、頭からすっぱり抜けていた。

どうやら彼らは鍵を取ってきて扉を開けたようだ。面倒をかけて申し訳ない。

途端に、皇帝の顔が羞恥に染まった。

なんで、今まで女性に胸を押し付けられようが夜這いされようが顔色ひとつ変えなかった皇帝が、そんな顔をするのだ。

「お二人さん、そんなに見つめ合わないでー」

警備隊の声によって皇帝は我に帰ったようで、促されるままに診察と取り調べに向かったのだった。

皇帝が相手にしていたのはこちら辺で有名なグループだったらしく、事情聴取は長時間に及んだ。しかも皇帝が医師の診察を受けるのを頑なに拒んだせいで、無駄時間を使ってしまった。理由はおそらく、というか絶対肩に見えた呪いのせいだろう。医者の方も「本人が大丈夫というのなら、そうなのでしょう」と言って結局診察を諦めてしまった。

事情聴取と医者診察から解放されたのは暗くなり始めた頃だった。詰め所の窓から見上げた空は深い夜の色に染まり、夕日の沈んだ方向に仄かな橙色が見える程度だ。

さて、そろそろ家族も心配しているだろうし、転移魔法でさっさと帰っちゃおう！！と思っていたのだが…………。

「すまないな。こんな遅くまで。俺が責任を持って送り届けよう」

全力でお断り申し上げます（本日2度目の心の叫び）！！

最強の魔力を持つ迷惑な皇帝の存在のせいで魔力を抑制しているの
で、転移魔法は使えない。つまり、馬車なり馬なりで帰るしかない。
しかも、このまま送り届けて貰うと自宅が公爵家だとバレてしまう。
いわば、町娘設定のほ・う・か・い！！それだけは何としても
避けなければ。

「いえ…………私としても、これ以上貴方にご迷惑をおかけするのは
……………」

非常に申し訳なさそうな表情を言うと、皇帝はにっこりと微笑
んだ。

「貴女は優しい人だな。だが、男としても女性を送らないわけには
いかない」

「はい……………」

なぜか断ることもできずに頷いてしまった。そのまま皇帝はリエナ
の手をとり、詰め所から出ていこうとする。

——が、ちょっと待てよ？

いつも転移魔法を使っていたから気付かなかったが、たしか、ここ
から公爵家の領地までは歩いて帰れる距離ではなかったような……
…。いや、馬車を使ってもかなりの距離だったような気がする。ぶ
っちゃけ、1日で帰れたっけ？

「…………あの、家は遠いので宿を取ろうと思います。だから、送っていただかなくても……………」

「それなら、宿まで送ろう」

「いえ、本当に……………」

「よろしいです、と言おうとしたところ……………」

「こんなに夜遅くまで話を聞かせてもらって、本当に申し訳ない。よければ、こちらで宿を提供しよう」

—————親切にも、警備隊の方が非常に余計なことをしやがって下さいました。

皇帝はリエナに「良かったな！！」と声をかけてくるが、ぜんぜん良くない。

おそらく皇帝は明日、家まで送ると再び申し出るだろう。

つまり、宿に泊まる＝2日連続皇帝の相手＋兄の誕生日パーティーに行けない＋もはや翌日の仕事にも間に合わない。

……………最悪じゃん。

かくして、リエナにとって人生最悪のお泊まりが決定となったのだ。つた。

15・ 皇帝の国民愛は自重した方がいい（後書き）

最近気づいたのですが、PCで読んでみるとこの小説の文章ってかなり薄っぺらいですね。

携帯での執筆力UPを目指したいと思います。

16・皇帝の国民愛は盲目

「……………なんであなたがいるんですか？」

思わずきつい口調になったのは許して欲しい。だって、本当に嫌なんだもん。

「いや、俺も宿をとろうとしていた」

悪びれた様子もなく言うのは皇帝。

先程ギルドの方から「明日も休み」との緊急連絡が届いたことから考えると、皇帝は明日の仕事を休む気満々の様子だ。

国を愛し、国のために全力を尽くす皇帝像はどこへいった？性格最悪、男としてもダメ、国への愛をなくすと、他には何にも良いところがないのに。……………あ、顔と金と権力があつたか。

宰相さん、頑張つてね。

皇帝不在の穴を埋めるべく必死に働いている宰相の姿が目に見え、心の中で声援を送った。

「……………あの、なぜ同室に？」

宿で自らの名を名乗ったところ、「警備隊の方から伺っております」との返答があり、すぐに部屋に通された。

その際に問題発生。

何と、皇帝とリエナは恋人か夫婦か何かだと思われていたらしい。

面倒なので放っておいたら、こんなところで最悪の結果を招いてしまった。

目の前に置かれているのはダブルベッド。寝室の他に余分な部屋はなく、バスルームとトイレがあるシンブルな間取りだ。

こんなやつて……ありえない！？

「だが、仕方がないだろう。この部屋しか空きがないのだから。ここだって、警備隊の計らいで部屋を取れたものの、彼らの口利きがなかったら借りられなかったのだぞ？」

一見、正論を述べているように聞こえるが、前提条件が間違っている。

——私たちは恋人でも何でもなし。………友
人で知らない。

皇帝め、平民の貞操観念舐めてるな？

貴族の子女は婚姻前の男女が同じ部屋で寝るなど言語道断だ。それは平民でも変わらないことなのだが、生まれてこのかた一度も政治以外のものに目を向けたことのない皇帝が、庶民の暮らしなど知るはずもない。

「……貴方がこの部屋を使うのなら、私は別の宿を」

「言うておくが、こんな夜に宿を探すのは無謀だ。それに、暗い中女性を出歩かせるわけにはいかない」

善意で訴えてくるとは、卑怯な。これが悪意に満ちたものだったら容赦なく突っぱねたものを。

ぶっちゃけ、国民の保護に意識が傾きすぎて男女のあれこれについて気が回らないだけだと思うが。皇帝の国民愛は盲目だ。

「こんな町娘を襲ってくる人なんかいませんよ。今日のは人生に一度有るか無いかの偶然です」

へら、と笑って言うてみるが、皇帝は相変わらず納得がいかないようにうで……………というより、呆れているような気がする。

「昼間には一人でふらふらしているし、夜には出歩こうとするし、あなたは無防備過ぎる。本当に町娘か？」

「いままで襲われたことはありませんでした!!」

胸をやや反らし、自信を持って皇帝に告げる。

「……………では、男に声をかけられたことは？」

「……………」

声をかけられるって、まさか今日の何か？いやでもあれは無防備とか関係なくて、単に親しくしてくれた人たちで……………。

実は、食事は断ったものの、彼らからの贈り物はちゃっかりと貰ってきたりエナだった。リエナの鞆の中は、クッキーやらキャンディやら甘いもので溢れかえっていた。

鞆から一つ、溢れてこぼれ落ちたクッキーの袋……………皇帝はそれを一瞥すると、呆れを通り越して哀れみの視線をこちらに向けた。

「言うておくが、それは媚薬入りだぞ？」

「……………え？」

びやく、と言ったか？

それは後宮でよく裏取引されているアレのこと？実は裏取引の犯人は、表向き皇帝のお相手をさせようと定期的に呼ばれている娼婦だとかいうアレのこと？皇帝には実は効かない（リエナ・リサーチより）アレのことか？

「まさかー。庶民が買える程度の娼薬なんて、効き目は無いに等しいですよ……………」

庶民が手に入れられるような娼薬は、質が悪く効果があるのかわいのかも判断がつかないくらいである。正直、異性を我が物にしたいなら娼薬を盛るより酒を飲ませた方がいい。

「では、試してみるか？」

「……………」

まさか、効く、とでも言いたいのか？

娼薬？を見てみると、うつすら魔法のようなものが。これはあれだ、いわゆる誘惑魔法だ。皇帝がいる前で魔法の解析はできないが、間違いない。

しかも、効果倍増の魔法がかかっているという、恐ろしいオマケ付きだ。

「…………… つつしんで、遠慮申し上げます」

媚薬＋誘惑魔法＋媚薬と誘惑の効果2倍！！最強の媚薬……………
……………絶対に試せない。

「では、これは没収させて貰う」

食べるなり魔法研究に使うなり、お好きにどうぞ。

——ん、ちょっと待てよ？

最近、多くの女性が男性に付いていつてしまう事件が多発していなかったか？……………皇帝がその捜査に乗り出した可能性は極めて高い。

皇帝の目的、わかつちやつた。

そう考えると、皇帝の今までの不可解な行動も納得がいくのだ。

おそらくだが、皇帝は捜査に乗り出してから、町娘ナナが媚薬の詰まった袋を大量に受け取っているのを目撃した。事件を解決する糸口になると考えた皇帝は、ナナと行動を共にすることにしたという訳だ。

しかし、配った男たちが犯人なのか、悪意を持って男たちに媚薬を渡した者が別にいるのか今の時点ではわからない。

媚薬をくれた男たちは、リエナが媚薬を飲んだ後にまた声をかけてくるか、媚薬を飲んだことを前提に夜に襲う気だろう。皇帝はそのチャンスを狙っている。

だから、強引にも夜も一緒に行動しようとするのだ。媚薬入りクッキーを食べさせて手っ取り早く男を釣り上げて良かったのに、リエナに忠告してくれたのは皇帝の優しさに他ならなかった。

そういうことか。じゃあ、遠慮なく協力させてもらいましょう。

——といってもたぶん、このまま待っていれば事態は動くはずなので、今は放っておこう。

「さつさと寝ましょう」

同じ部屋に泊まることをさんざん渋っていたはずなのに、突然就寝準備を始めたリエナの行為に皇帝は目を瞠った。

リエナは驚く皇帝をよそにダブルベッドに潜り込み、招かれざるお客様が来るまでぐっすりと眠ることにしたのだった。

事態は夜に急変する。

深夜、皆が寝静まった頃にリエナの部屋の扉を開ける者がいた。

てか、本当に来るんだ。……………ここ、二人部屋なんだけどな。

二人部屋ということは、もう一人誰がいる可能性に考えが及ばないのだろうか。しかも、二人部屋は大抵の場合、夫婦で使ったりする女性一人ならまだしも男性がいるとなればなかなか手が出しにくいはずだ。

そう思っ、仰向けに寝ている状態で視線だけを皇帝の方に向けてみれば、皇帝は……………いなかった。

恐らくリエナしかいないことに安堵した犯人が油断した隙に捕まえる算段なのだろう。

男はそろりそろりと足を忍ばせながら歩き、ついにベッドの側まで移動してきた。眠ったフリをしているので、気配から大まかなことしか感知できないのだが、歩き方から察するに男はどうやら武の道に優れた手練れのようなのだ。

男が布団を捲る。

そして、リエナの町娘ウィッグのおさがが解かれた茶色い髪にさりと触れてきた。……………どうやら犯人はよっぽど余裕があるらしい。普通ならさっさと襲うなり、自分のテリトリーに連れ去るなりするだろう。

そして、ついにリエナの体に触れようと手を伸ばしてきた。

そして、感じたのは先日経験したばかりの浮遊感。お姫様抱っこ。

———え、もしかして、誘拐？……………そっちがメインか。

あれほどの媚薬だと、人の精神を操ってしまう。正常な判断ができなくなったところで連れていけば、さわがれることもないのだろう。そして、自分に陥落した女を誘拐して帰るという訳だ。

———なんて大胆な犯行。

人を即座に陥落させてしまうほどの媚薬は人の精神まで操ってしまうので、法によって禁止されている。貴族の間や花街といったところでは陰で取引されているのが実態だが、それでもバレればかなり厳しい処罰が下される。ただ傷を負われるより、媚薬を盛られ自我を操作された方が心に深い傷を残すことが多いからこそその厳罰なのだ。

そんなリスクを負うくらいなら、睡眠薬でも盛って誘拐した方がよい。おそらく犯人は、こういった犯罪に手慣れた愉快犯だ。

———結構、ヤバイかも。

傭兵としての血が騒ぐ。相手は賞金首の可能性が十分にある。今日一日、いや明日の貴重な（金稼ぎの）時間までも奪われてしまった。

久しぶりに、暴れてみようかしら？

相手は、犯罪を悪事とも思っていないような男。今まで散々悪どいことを行ってきた、報復がない方がおかしいのだ。

リエナは顔を覆う茶色い髪の下で口端を吊り上げ、笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3125u/>

「白銀の華」の代わりにどうぞ。

2011年11月13日07時30分発行